
IS-インフィニット・ストラトス-知識を求めるもの

rei

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS - インフィニット・ストラトス - 知識を求めるもの

【Nコード】

N 8 2 5 7 X

【作者名】

r e i

【あらすじ】

世界にはさまざまな不思議であふれている。

この世界で何かを証拠にして説明することはそれを否定する証拠にもなりうる

この世界に”絶対はない”

ブローグ

この世界には100%と0%は存在しない

誰が言った言葉かはわからないがその言葉は俺にとって衝撃的だった

この世界にはさまざまな理論や常識がある

しかしその言葉はその理論や常識をただ受け入れていた俺にとって
確実に変化をあたえた

そう

「絶対」なんてものはこの世界のどこにも存在しない

なぜならそれを定めたのもそれに縛られるのもすべて同じ人間なの
だから

だから俺はありとあらゆる知識を吸収した

そして理解した

人間の定めた「絶対」を超えるにはなによりその「絶対」を知らなければならぬ

そんな生活をするようになってから2年

俺が6歳のとき

世界の「絶対」は覆された

「IS」「白騎士事件」

その二つは今までの世界を完全に塗り替えた

俺の両親はもともと軍関係の仕事をしていた

だが「IS」の登場により立場を失い母と一緒に自殺してこの世を去った

それについて何か思うところがないわけではなかったがそのときのおれは両親の死よりもあらたに現れた「IS」についての興味でい

っぱいだっ

既存の理論の壁をやすやすと越えるオーバーテクノロジーの塊

ぜひともそれについて触れたいと思った

しかし問題があった

そつ「IS」は女性にしか使えなかったのだ

それゆえに世界は女尊男卑の社会が浸透し、いつしかそれが当たり前となった

「ISが使えるのは女性だけ。ゆえに女性のほうが優れている」

それについても俺は特に思うところはなかった

世界がその傾向にあるうとも俺には関係ないからだ

だがその常識「ISを使えるのは女性だけ」という理論が「絶対」と信じて疑わない世界は気に入らなかった

なぜありのまま受け入れる？

なぜ信じて疑わない？

なぜ？なぜ？なぜ？

だから俺は「IS」について学んだ

開発者 篠ノ之束の論文を読み存在しうるすべての「IS」に関する本を読んだ

そしてそのかいあつて12歳にして「IS一級整備士」の資格を得ることができた

至上最年少での記録に興味をしめした倉技研の勧誘を受け俺は倉技研に所属することになった

そしてそれからさらに2年 「IS」について研究開発をしそれが認められついには倉技研のIS部門総責任者まで上り詰めた

ほんとに俺みたいな年齢のやつに任せていいのか気になるところだ
がいいといっている以上気にしないことにした

そしてあるひ俺のもとに依頼が来た

「日本の代表候補生の専用機を作ってほしい」というものだった

俺達はすぐに製作に着手した

ベースとするのは日本で今一番つかわれている「打鉄」と呼ばれる
量産機

それをもとに改良をすすめ専用機とすることになった

仮の名称は「打鉄二式」

開発は順調だった

当初の予定より高性能な期待に仕上がる予定だった

だがそこで事件が起きた

なんと俺が「打鉄式式」を起動させてしまったのだ

原因はわからない

いままでも「IS」に触れることはあったが起動させたのは初めてだった

「打鉄式式」はすぐに「初期化」と「最適化」を完了させ俺の専用機になってしまった

かくして俺は図らずして世界の常識を覆したのだった

IS学園入学（前書き）

作者のハートはガラスです

感想は歓迎ですがあまりきついと作者のハートが砕けてしまいます

IS学園入学

おれがISを起動させてから2ヶ月

俺はIS学園に入学していた

もちろん俺の意思ではない

俺がISを起動したのはすぐに日本政府に伝わった

それを知った日本政府は俺を保護の名目でIS学園に入学させるとともに世界に”ISを動かせる男”として宣伝するつもりらしい

しかし自体は政府の思惑通りには行かなかった

なぜなら俺は最年少の倉技研所属のIS開発者であり簡単に異動はできなかったからだ

俺はすでに開発者としての力は世界中の開発者の中では有名だった

なにせ第三世代の技術といわれる”イメージインターフェイス”の

開発者は俺なのだから

そんなわけで俺はISにおいての発言権、影響力ともに政府のそれをしのいでいるのだった

そこで俺はIS学園に入学するときに条件をいくつか出した

- 1 学園内設備施設の自由使用
- 2 有事の際の独自行動の承認
- 3 学園のIS「打鉄」を二機譲渡する
- 4 授業中における行動への不干渉

以上4つを認めさせた

3つ目のISの譲渡は非常に渋ったが俺の開発したISのデータが取れるのならやむをえないとして泣く泣く認めた

かくして俺はIS学園に入学した

「私は副担任の山田真耶です。どうか皆さん、一年間よろしく願いますね」

いま教壇のところで話をしているのは山田麻耶

俺のクラスの副担任である

ちなみに今の先生の挨拶に対しての生徒からの反応はなかった

「えつとそうですね・・・、それでは最初のSHRは皆さんに自己紹介をしてもらいましょう」

先生は気まづくなった空気を振り払うためにそう提案する

それにしたがいみんな簡単に自己紹介をしていく

俺は苗字が霧生なので五十音順でいくと最初のほうなのだが今はとくにくくりなくみんな座ったいるため苗字を気にする必要はない

ちなみに俺が座ったいるのは廊下側から2列目の一番後ろで今は窓側から紹介して言っているので当分は回ってこない

・・・それにしてもやはり予想していたとはいえかなりきつい状況だな

自分以外全員女子というこの状況は

いや、もう一人いたな

たしか名前は「織斑 一夏」だったような気がする。前に俺と一緒にテレビで扱われていたはずだ

今は一番前の席に座っている

後ろから見るとかなり挙動不審だな・・・

まあそれもしかたないな。俺が一番後ろに座っているので横からの視線しかないがあいつは一番前。つまりは自分の全方向から女子の視線を受けていることになる。

俺だったら・・・考えたくもない状況だな

「・・・くん、・・・くん、織斑一夏くん」

「は、はい！！」

俺がそんなことを考えているとどうやら織斑の番になったらしい

あまりに緊張していたからなのかはわからないが上ずった返事を返してしまう織斑

とうぜん周りからはくすくすという笑い声が聞こえそれがさらに織斑を緊張させる

「ひゃ！？あ、あの・・・お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってるかな？？もしそうなら、ごめんね、ごめんね！！」

その織斑に対して自分が大声を出したことにたいして怒っているのではないかと聞いている山田先生。なぜか目じりには涙がたまっていて今にも泣き出しそうだった。

こんなんで副担任、いやこのクラスをまとめることができるのだろうか？

俺が言うのもなんだがこのクラスは相当おかしい編成をしている

男性でありながらISを動かせた”俺”と”織斑”だけでも相当ことだがそれだけではなくこのクラスには篠ノ之束の妹がいる

さらには対暗部暗部組織”更識”の従者までいる始末

そのほかにもイギリスの代表候補生もいて相当力オスな編成になっている

個人的にはデータがとりやすくなるのでありがたい話なのだがそれをまとめなければならぬ立場からすれば相当頭の痛い話だろう

このクラスの担任は誰なのだろうか

もしまとめられるような人物ならその人は人間ではないな

「ほう、だれが人間ではないんだ？」

俺がそんなことを考えていると俺の後ろから突然声がかかった

そこを向くとなんとそこにはかのブリュンヒルデ”織斑 千冬”がいた

あゝやっちゃったかなゝと思っているとブリュンヒルデがもう一度問うてくる

「もう一度聞こうか。だれが人間ではないんだ？」

「あゝそれはあなたですよ。ブリュンヒルデ」

隠しても無駄そうだから俺は白状することにした。だってなんか「うそをついたら 殺す」みたいな雰囲気してるんだもん

「その名で私をよぶな。ここでは織斑先生だ」

「はあ、それでなんでここにブリュンヒルデじゃなかった織斑先生がいるんです？」

俺が心底なぞに思っていると今まで黙っていた俺の隣の席の生徒が答える

「それはね〜なっちゃん、織斑先生が〜このクラスの担任だからなのだよ〜」

今答えたのは先ほどでてきた対暗部暗部組織”更識”の従者である”布仏本音”である

なぜ俺が名前や立場を知っているかはここでは割愛しよう

にしてもそうか〜織斑先生がこのクラスの担任か〜へ〜

「マジで?」

「マジなのだよ〜」

「そうか・・・この世界に神はいない」

「どうしたの〜なっちゃん?」

いや、だってさあのブリュンヒルデだよ?めっちゃんめんどそうじゃん!!見るからにルールにうるさそうだしめんどそうだし厳しそうだしめんどそうだし

「なんだ?不満か?」

「無満ではないですよ。ただ面倒くなりそうで鬱だなと思っただけです」

「ほう。安心しろ、私は厳しいからな」

「・・・だから面倒なんじゃないですか」

俺がorzな体勢でおつになっていると横から誰かが頭をなでてきた

「だいじょうぶだよっちゃん。わたしもいるから」

「それが何の解決になるんだ？」

「え〜とね〜、わかんない！」

「はあ・・・もういいよ」

俺達がこんな感じのやり取りをしているのを周囲は興味深そうに観察している。そんなに珍しがるようなものだろうか？女子の考えはよくわからん

「さて、話はまとまったな。次はお前が自己紹介しろ」

「なぜです？まだ俺の番ではないはずでは？」

「きにするな。というか周りがきにしすぎていいかげん収集がつかなくなりそうだからな・・・」

「はあ・・・まあ確かにこの状況は少々まずいですね」

今の状況を簡単に説明すると俺、いや俺と織斑先生そして本音に対する周囲の興味や嫉妬の視線がきついです！！なんで俺に対して嫉妬の視線も飛んでくるのかはわからないが今にも爆発しそうな状況でした

なので俺は速やかに自己紹介することにした

「霧生 凧です。偶然ISを動かせたのでこの学園に条件付で入学しました。ちなみにその本音とは幼馴染です。好きなことは知識を得ることに研究、嫌いなことは面倒なことです。まあ、これからいろいろあると思いますが偶然にも一緒のクラスになった以上仲良くいきましょう。1年間よろしくお願いします」

俺はそういつて頭を下げた。まあ、こんな感じでいいだろう。

「さてまだ自己紹介が終わっていないようだがもうそろそろ時間がないので後のものは適当にやっておけ。ちなみに私がこのクラスの担任を務めることになった織斑千冬だ！君たち新人を15〜16の間に使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。出来ない者には、出来るまで指導してやる。逆らってもいいが私の言うことは聞け、よかつたら返事をしろよくなくても返事をしろ、私の言うことには返事をしろ、いいな？」

・・・何というまるで軍隊のような言葉であつたがそこには消して見捨てないという確固たる自信を持っているのを感じさせる挨拶をした

これが世界最強の威厳というやつなのだろうか？

と考えていた俺の思考は急にさえぎられた

「きゃあああああ！！千冬様、本物の千冬様よ！！」

「ずっとファンでした！！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！！北九州から！！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！！」

「私、お姉様のためなら死ねます！！」

・・・なんとか予想外だった。世界の頂点に教えてもらえるのは確かに光栄なことだがこれはいくらなんでも予想外だった。後最後のやつ、さすがに死ぬのはどうかと思うぞ。もつと命は大事にしないさい

「・・・毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

織斑先生はあきれたように頭を抑えてつぶやくが彼女達にはさらに火をつけたらしく

「きゃあああああ！！お姉様！！もつと叱って！！罵って！！」

「でも時には優しくして！！」

「そしてつけあがらないように躑をしてええええええ！！」

さらにヒートアップしていた・・・なんかここまでくると何を言っても無駄なような気がする。織斑先生も無駄だと悟つてのか頭を抑えているがそれ以上は何もいわなかった

そんな感じで初日のHRは終わった

のだがその後俺が周りから質問攻めにされたり視線で殺されそうになったりしたのを追記しておこう

はあ、これから面倒になりそうだな・・・

いきなりの面倒ごと（前書き）

さて第二話ですがやはり文章などを評価してくれる人がいるのはうれしいですね

今後ともがんばるためにはみなさんの応援が必要です

今後ともよろしくです

ではどうぞ

いきなりの面倒ごと

IS学園とはその名の通りISについて学ぶ場所だ

それゆえに倍率も高く授業のレベルもかなり高い

何が言いたいのかというと、入学式の日も授業があるのだ・・・

「・・・であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によって罰せられ・・・」

教壇に立つて、教科書片手に授業を行っているのは山田先生

さっきのHRではかなりおどした様子だったが授業になるとその様子は消えていた

というかなぜに副担任が授業してるんだ？ちなみに担任は脇で腕を組んで授業を見ている

たしか副担任の仕事は担任の補佐と担任不在時の代役のはずなのだが・・・

さて、それはおいておくとしてさっきも言った通りこの学園はレベルが高い

つまりところこの学園に入れるやつはみんなそれなりにできるやつだということになる

そのはずなんだが・・・

もう一人の男である一夏の方を見てみると、教科書と山田先生を交互に見ては、ぱらぱらと教科書を行ったり来たりさせている

さつきから授業には関係のないページを開いては頭をひねっている
なにをやっているんだ？

ちなみに俺はもともとが蔵技研所属なためISについて知識として
コアに関して以外は完璧にしたある

なので織斑の挙動不審な動きをなんとなく眺めていた

「織斑くん、何かわからないところがありますか？？」

するとそんな織斑の様子に気がついた山田先生が一夏に対して話し
掛けた

織斑ははつと顔を上げてまたなにやら戸惑っている

「あ、えつと・・・」

「分からないことがあったら何でも聞いてください。なんせ私は先
生ですから！！」

なぜか先生ですからを強調している山田先生
本人はそんなつもりはないんだろ？がそのしぐさは正直はんそくで
ある

なぜならそのしぐさをするとちきれんばかりの胸が更に強調され
るからである

男である以上そこに目が言ってしまうのは仕方のないことであるだ

ろう

と、つい柄にもなく考えていると突如俺の頭にシャーペンが飛来した
飛んできた方向は俺の左隣
つまりは本音からであつた

なんだと本音のほうを見るとそこには相変わらずのほほんとした笑
みでこちらを見ている本音がいた

ただいつものほほんとした笑みとは違い何か恐ろしさを持った笑
みだった

さすがは対暗部暗部組織の従者といったところだろう

「・・・せ、先生！」

「はい、織斑くん!!」

織斑はついに意を決したように山田先生に話しかけ山田先生はどん
とこいといった感じで返事をした

「ほとんど全部分かりません!!」

「え・・・??? ぜ、全部、ですか・・・??」

・・・おいおいそりやないだろ

さすがに山田先生も予想の斜め上の返事に戸惑っている

「え、えっと・・・、織斑くん以外で、今の段階でわからないって
いう人はどれくらいいますか??」

山田先生はクラスに対して確認を取る
もしみんなわからないのだとしたらすさまじく問題であるからである
しかし誰も手を上げない

「・・・」

それはそうだろう

ここにいるやつらはみなこの程度は理解できなければいけないのだから

「おい風、お前はわかるのか？」

織斑が俺に聞いてくる

その目は「お前もわからないよな？」といていた

「当たり前だろう。この程度理解できないのならここにいないさ」

織斑はorzの体勢をとった

授業中なのだが・・・

「・・・織斑、入学前の参考書は読んだか??」

そんな状況の中さつきまで腕を組んで授業をみていた織斑先生が確認をとる

その表情はまさかよんでいないのか?という顔をしていた

まあ、でもさすがに読んでないなんてことは・・・

「古い電話帳と間違えて捨てました」

・・・あったよ。てかどうすれば電話帳と間違えるんだよ
たしかに電話帳サイズの厚みはあったが普通表紙みて確認するだろ・
・

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者！！」

織斑先生の雷が織斑に落ちる

若干哀れではあるがこれは確実に織斑が悪い

「あとで再発行してやるから一週間以内に覚えろ。いいな」

「あの厚さを一週間で！？無理だつて！」

「やれと言っている」

「・・・はい。やります」

そんなやり取りもありつつ一時間目の授業は織斑の頭出席簿が落ちた以外は平和に終わった

ちなみに俺はその後ずっと本を読みました

その後の休み時間に織斑がやってきて織斑のことを一夏と呼ぶことになったりイギリスの代表候補生、たしかオルコットとか言うのが話しかけてきたりそこでまた一夏の馬鹿さ加減が明らかになったり

といろいろとあったが俺には関係ないので割愛させてもらう

あ、オルコットが一夏に話しかけてきた瞬間俺はめんどそうなので逃げましたがなにか？

休み時間の終わりに戻ってみると一夏が「逃げたな」的な視線を送ってきたがスルーしておいた

さて時間はすすみ居今は二時間目

HRの時間を入れるとさっきのが二時間目で今が三時間目となる

教壇にたっているのは織斑先生

そのせいかさつきまでの時間よりもクラス内が真剣さで満ちている

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

と、授業を始めようとしたがそこで一度織斑先生は止めた

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

と切り出した

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席・・・つまりは、まあ、クラス長だな」

どうやらこの学園ではクラスの代表を決めなければならないらしく

また、それなりに責任も伴うらしい

「ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はない・・・が、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりでいるように」

ふむ・・・めんどそうだな

できればやりたくはないがここはIS学園

つまりは俺と一夏を除けばあとは生徒全員が女子

話題に事欠かない俺たちが推薦される可能性は非常に高い

まあ、俺はやらないけどね時間なくなるしめんどくさいし疲れるしめんどくさいし

「それで誰か立候補者はいないか?? 推薦でも構わないぞ??」

「はいっ。織斑くんを推薦します!!」

案の定一夏が推薦される

「私もそれがいいと思います!!」

「私もー!!」

最初の発言に重なるように一夏を代表にという意見が次々に上がる

「お、俺!？」

「では候補者は織斑一夏・・・ほかにはいないか??もう一度言うが、自他推薦は問わないぞ。それと織斑。いい加減に席に着け、邪魔だ。さて、他にいないのか?？」

「私はなっちゃんを推薦しまゝす」

「なぜに?」

一夏に押し付けられそうだと思った矢先俺の横から俺を推薦する意見が上がる

推薦したのはもちろん本音

なぜにという視線を向けると少し申し訳なさそうにこっちをみた

おそらくはあいつの差し金か

最近まったく連絡取ってないから怒ってるんだろう

「はいはい、私も霧生くんに一票いれまゝす」

「私も霧生くんを推薦しまゝす」

またしても俺を推薦する声があがる

「候補者は霧生皿と織斑一夏。他にいなければこれで締め切るぞ」

織斑先生がそいうと一人の女子が机をたたきながら立ち上がった

「待ってください!納得がいきませんわ!」

立ち上がったのはさつき一夏に突っかって言っていたイギリスの代表候補生のオルコットであった

「待ってください！！そのような選出は認められません！！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

・・・

「實力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！！わたくしはこのような島国までIS技術な修練に来てるのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！！」

・・・

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！！ISの知識もろくにない極東のサルや、ISも使えないくせに玩具でISに対抗しようとしている極東のサルがクラスの代表になるなんてありえませんわ！！」

・・・うぜえよこいつ

なんかマジでイラついてきた

いつもは切れたりしない俺だが今回は久々に切れそうだ

だが、落ち着け冷静になれ

ここでほうつておけば俺は代表にならずにすむ

面倒ごとに巻き込まれない

・・・よし落ち着いた

このままこいつをおだてて押し付ける方向でいこう

「いいですか！？ クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！ 大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で」

「イギリスだつて大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「なっ……！？」

なんか一夏が切れた

「あつ、あつ、あなたねえ！ わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「侮辱もなにも、先に馬鹿にしたのはそっちの方だ。違うか？」

・・・あれ？

「決闘ですわ！」

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

おかしいな・・・

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い、いえ、奴隷にしますわよ」

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

「そうですか？ 何にせよちょうどいいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの实力を示すまたとない機会ですわね！」

「ハンデはどのくらいつける？」

「あら、早速お願いかしら？」

「いや、俺がどのくらいハンデつけたらいいのかなーと」

「お、織斑君、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

クラス全体が笑う

「なに言ってるんだよ、俺と風はIS使えるんだぜ？ やってみなきゃわかんないだろ？」

なあ？と言いたげな視線を送ってくる織斑

なんかよりいつそう面倒な事態になってね？

「よし、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。まずは織斑とオルコットで戦い勝った方と霧生が戦う。それでいいな」

有無を言わせない織斑先生の言葉でしめられた

あれ？俺一言もしゃべってないのになんか面倒ごとに巻き込まれてない？

いきなりの面倒ごと（後書き）

どうでしたか？

文章の文字数は少しだけ前回より多いですがそれでもまだ少し少ないですね？

今後でも精進していきます！！

初日の終了と再会（前書き）

こんな駄文を読んでもくれる方がいるなんて感激の極みです

今後ともがんばっていきます

ぜひ作者のために感想などをくれるとうれしいです

ではどうぞ

初日の終了と再会

「ようやく終わった・・・」

ようやくIS学園初日の授業のすべて終了したのだ

背伸びをするそばきばきという音がした

一夏のほうをみると机に突っ伏している

まあ一日中最前列という位置で女子からの視線をもろに受けていたのだから仕方ないか

それに自業自得とはいえ織斑先生に何回か出席簿アタックをくらっていたからな

てかあれぜったい出席簿でだせる音じゃない気がするんだが・・・

俺がそんな感じのことを考えているとさっきまで机に突っ伏していた一夏が話しかけてきた

「ようやく一日終わったな」

「ああ、お互いお疲れ様だな」

「ああ、にしてもこれは肉体的な疲れってよりも精神的な疲れが大きいような気がするよ」

「それについては激しく同意する」

はあと男子二人今日のお互いの状況を話しながらお互い励ましあっているとき出て行った山田先生が戻ってきた

ちなみに今は最後の授業が終了してから2時間ほどたっているので

さつきという表現はおかしいのだが山田先生はさつきまで今日の授業で一夏の知識に相当な問題を感じたようで

「先生ですから!!」

といて放課後一夏にISについて補修したいのだ
ではなぜ余裕な俺もここにいいのかというと

「山田君はその、なんというか、少々想像が過ぎるといかなんというか・・・とにかく危ない状況になることがある。お前だけが頼りだ!」

と織斑先生に言われたため言い方は悪いが山田先生の監視のために一緒に残っていたのである

まあ今日の授業を見る限りこの二人だけにすると補修どころではなくなりそうだしな

無難な判断であるといえるだろう

さて、その補修が先ほど終了したわけだが当然入学前の参考書を捨ててしまい読んでいない一夏が簡単に理解できるはずもなく結果的に今日一日のとどめを山田先生にさされた形になった

この後日一夏にはさらに物理的なとどめが下される斧だがここでは割愛しよう

「ああよかった、まだいました」

と、先ほど出て行った山田先生がすこしいそいで戻ってきて言った

「お二人の部屋割が決まりましたよ」

「え??俺は確か一週間は自宅通学って言われてたんですけど??」

部屋割りが決まったという言葉に疑問を返す一夏

普通に考えればわかるだろ・・・

と若干あきれていると山田先生が

「ええ、本当はその予定だったんですがお二人の場合は特別なケースでしたので何とか部屋を用意したんです」

「??なんで俺らは特別なんですか??」

はあ・・・こいつ自分の立場わかってないな

「一夏、俺らがい今言つのはどこだ?」

「え?IS学園だろ?」

「そうだつまり俺らはISを動かせる。そして俺らは男。これがどついう意味を持つのかわかるだろ?」

「??」

本当にわからないといった顔そする織斑

山田先生も若干苦笑いをしている

「つまり俺らは研究者やほかの男たちから狙われる危険があるんだよ。研究者にとってはいいモルモットだから俺らは」

「ああ、でもそんなことおこらないだろ？」

「この世界に絶対なんてない。可能性がある以上ここにおいておくのが一番なのさ。納得しなくても理解はしておけよ」

俺は最後にそう一夏に告げる

一夏はわかったようなわからないような表情をしていた

「それで山田先生、俺らは相部屋ですか？」

そろそろ部屋に帰ろうと思い山田先生にきく

「いえ、部屋割りの都合上お二人は別々でそれぞれ女生徒との相部屋になります」

少々気まずげにいう山田先生

「そうですか・・・まあいいですなるようになるでしょう。で、部屋番号は？」

「え」と織斑君は1025で霧生君は1034です」

そっついながら鍵を渡す山田先生

「それとこの学園意は大浴場があるんですけどお二人はまだ使えません」

「え???何ですか?」

おいおい一夏そんなこともわからんのか？

「お前は女生徒と一緒に風呂に入りたいのかばか者」

ばこん！！という出席簿が一夏の頭に落ちる音とともに織斑先生が現れた

てか威力高いなぐだつて一夏伸びてるし

「お、織斑君！？大丈夫ですか！？」

「霧生やつのは気にせず部屋に行け。荷物は今日お前が学園に送ったものを運んでおいた。」

「そうですね、そうさせてもらいます」

俺はそういつと部屋にむかって歩き出した

「1034 ここだな」

こんにちは

一応鍵を持っているが同居人が何をしているかわからない以上礼儀としてノックをして様子を見ることにした

「?どつぞ〜」

中から返事が返ってきた

「失礼する」

俺はそういいながら部屋に入った

部屋に入るとそこにはベッドが3つならんでいてそのうちの2つに人がいた

おそらくは同居人だろう

「あれ？ なっちゃんだ〜どうしたの〜？」

「え？ 凧！？」

「何でお前らがここに？」

部屋のベッドにいた同居人は俺の幼馴染

同じクラスで隣の席の布仏本音と更識簪の二人だった

俺はむかし両親が自殺してから更識家に少しの間やつかいになっていた

本音は幼稚園のころからの知り合いで幼馴染

簪はお世話になったときに知り合い仲良くなったことからも幼馴染である

「それはここがわたしとかんちゃんのへやだからだよ」

俺の先ほどの問いに答える本音

簪はあまりの自体に呆然としている

「え？ え！？ 凧！？ なんで、ここに！？」

簪はようやくわれに返るといつもの彼女からは想像もできないぐら
いおおきな声で言う

「俺も今日からここで生活するんだよ」

「そう、なんだ・・・」

「なっちゃんと一緒か」

「ごめんな。いやかもしれない」「そんなことない（よく）！」「そ
うか」

俺が言い終わる前に言葉をさえぎる二人

いくら知った中とはいえ同居はいやだろうと思ったが二人は若干ほ
ほを染めながら俺の言葉を否定する

「それにしても・・・なんで連絡くれなかったの？」

簪が少し怒ったふうに聞いてくる

「忙しかったからってのもあるけど俺も必死だったから。正直に言
うと周り気にする余裕なかった。ごめん・・・」

俺が倉技研に配属してからは本当に忙しかった
知識と知っていて理解していても自分で考え作るというのは勝手が
ちがった

いくら俺が俗に言う天才でもその日々はまさに多忙だった
だから連絡したりすることに気を配れなかった

「・・・そう、なんだ」

「ごめん・・・」

「いいよ、もう。また・・・会えたから」

「ありがとう。それと俺もうひとつ謝らないといけないことがあるんだ」

「なに・・・?」

「簀の専用機開発を倉技研でで請け負ったのは知ってるだろ?」

「うん」

「その専用機なんだけど・・・俺にしか使えなくなった」

「・・・どういうこと?」

「俺がISを動かしたのは知ってるだ?そのとき起させたのがその簀の専用機だったんだ。俺が起動させてから何度コアを初期化しようとしても受け付けなくて今俺の専用機のコアとして使われてる。だから今簀の専用機は何もできてないだ・・・」

「そう・・・べつに、いいよ」

「え?」

「別にいいよ・・・私は、風とまたこうしてあえるだけで・・・うれ

しいから
「

「ごめん。そしてありがとう」

「うん・・・」

「それで専用機だけど」

「うん」

「俺が学園側から譲渡された打鉄のコアを使って俺がここ（学園）で作ることになった」

「・・・いいの？」

簪はためらいがちに聞いてくる

簪は昔から我慢ばかりしているからな

「いいもなにももとうちで作ることになってたからね。それを俺のせいでコアまでなくしたんだから俺が一人で作るよ」

俺がそういうと簪は首を横に振りながらいった

「一人、じゃないよ・・・私も手伝う」

そう申し出てきた

「でもこれは俺の責任だし」

「いいの。手伝わせて・・・」

声は小さいが俺はそこに確かな簪の自己主張を感じた
これを拒むのは失礼だろう

「わかった。俺たちで最高のものを作ろう!」

「うん・・・!」

「わたしのこと忘れてないかな」・・・

「あ・・・」

「やっぱり忘れてたんだ・・・」

こうして今日

IS学園入学初日は終わった

今日一日で相当疲れたな・・・明日からの生活が思われるよ・・・

はあ・・・

追記 その夜の夕食は久しぶりに簪と本音、それといつの間にか現れた楯無と虚と俺の5人で外食しました

外出許可申請?そんなものするわけないじゃないですか

そこらへんは楯無に何とかしてもらいました

飯にも生徒会長みたいだしそこらへんは融通が利くようだった

まあ、そのとき虚が頭を痛めていたことから手続きなどは虚に丸投げしたんだろうが・・・

初日の終了と再会（後書き）

次の投稿は1週間後です

クラス代表決定戦（前書き）

今回は風君の戦闘シーンはありません

次話へのつなぎです

感想などなどよろしくお願いします

クラス代表決定戦

あのIS学園入学初日に俺に降って来た面倒ごとの日がやってきた
イギリスの代表候補生が宣戦布告してから1週間
その間俺は自分のISの整備開発を簪、本音と三人でして過ごした
一応完成してはいるので戦闘はできるがまだ完全に完成していない
ものがあつた

「エナジーウイング」

俺の機体を実装している次世代飛行ユニット
その名の通りエネルギーで翼を形成して今現存しているどの技術よりも飛行能力を高めることができる
エネルギーによる形成された翼なのでそれそのもので防御することもできる

と、ここまでならただ便利な次世代の技術なのだがこれは問題を抱えていた

そう、この技術はエネルギーを翼の形に固定しなければならない
理論は出来上がっているのだがまだ完成はしていないのである
飛行ユニットが出来上がらなければ普通の戦闘はできない
なのでなんといしても完成さえなければならぬ

なので俺は簪たちに協力してもらった
楯無や虚も協力してくれるといったのだが生徒会所属の人間が肩入れするのはまずいということで辞退してもらった

1週間簪たちと整備質を借りきり作業をすすめ何とか固定化まではできるようになった

これでなんとか飛行はできる

だが、ここでまた問題が発生した

出力を上げられないのだ

出力を上げると形の固定化ができなくなり固定化されていたエネルギーが暴発し命の危険があるのだ

試験的に出力を上げたさいそれが起こり俺は危うく死に掛けた

なので今の俺の機体は最大出力を出すことができずベストな状態には程遠かった

まあ、それでも既存の第3世代型には遅れをとらないだろうが・・・

さて今俺はアリーナのモニターで一夏とオルコットの試合を見ている
今回はクラス代表決定戦という名目での一夏とオルコットの決闘の
ようなものなので俺は完全にとばっちりだろう
なのでまずは二人で試合をしてその勝者と俺が戦うという方式をと
っている

なので俺は今モニターで試合を見ているのである

試合は開始のブザーとともにオルコットが一夏に向けて射撃をした
銃の名前はスターライトというらしい

当然初心者の一夏がかわせるはずもなく被弾しいきなりシールドエネルギーを削られる

それからお互い攻防、いや一夏は交わしていただけたがを繰り返す30分ほどが経過した

一夏はシールドエネルギーを三分の一くらいまで削られればいいっぱいなのに対してオルコットはまだ無傷だった

まあ相手が代表候補生というのもあるが何より機体の武装相性が圧倒的に悪い

オルコットの「ブルー・ティアーズ」は巨大な狙撃用レーザーライフル「スターライトmk3」と、機体名と同名の自立誘導兵器通称4基による全方向からの遠距離射撃を可能にしているのに対し、一夏の「白式」の白式はなんと近接ブレードが一本だけ

これで30分も持つのはさすがとしか言いようがない
アリーナ内も一方的な試合内容にあきれの空気が漂っていた

俺に言わせればあのビットには問題があるように思える
なによりオルコットの直接命令を出しているため攻撃パターンが単調になりさらにはビットを操作している間は一度もスターライトを打っていない

おそらくはビットの制御に手一杯で射撃ができないのだろう
そこをつけば近接ブレードしかない一夏でも何とか勝機があると思うのだが一夏が気づくかどうかの問題だな・・・

なんせあいつはこの1週間ずっと剣道をやっていたと聞く
確かにISはあくまでもスーツなので悪くはない選択だが初心者が扱い方も知らないのに動きを学んでも意味がない

さて、あいつは気づくかね？

俺がそんならちもないことを考えているとモニター内で状況が変わった

一夏が近接ブレードでビットを切り裂いたのである

先ほどまでかわすので精一杯にみえた一夏だが今はビットの攻撃を完璧によけ次々に切り裂いていく

どうやら癖に気がついたようだ

オルコットの操るビットは必ず人の死角となる場所からしか攻撃してこない

つまり後ろや真下にしかこないのだ
それに気づいたらしい

一夏の動きは先ほどまでとは打って変わりよくなっていた
ビットをすべて破壊しそのままオルコットに向かって突っ込んでいく
だが次の瞬間一夏は爆炎に包まれた

どうやらオルコットがミサイルを二機隠しもっていたらしい
直撃を受ければあのシールドエネルギーでは終了である
オルコットも自分の勝利を確信しているようだった

だがまだ試合は終わっていないかった

爆炎の中から一夏は出てきた

出てきた一夏のまもっていた機体はさっきまでとは違っていた

なにより気になったのは先ほどまでもっていた近接ブレードである
先ほどまでは普通のものとなんら変わらない形をしていたそれは今はブリュンヒルデが使用していた近接特化ブレード「雪片」に酷似していた

・・・もしあれが本当に「雪片」なのでしたらおそろくあれの能力は

「バリア無効化攻撃」

相手のバリアなどを無効化し攻撃することができるまさに一撃必殺の能力

ビーム兵器に対して絶対的な力を発揮するそれはまさしくオルコットの天敵になるだろう

・・・ただ本当にそうなら今の一夏が使えば

そこでブザーが鳴る

「試合終了、勝者、セシリアオルコット！」

負けるぞ？

「なんで俺負けたんだ？」

俺が一夏のピットに行くとな案の上一夏は自分が負けた理由がわからないようだった

確かにあの時一夏の攻撃はオルコットを捕らえいた
確かに決まったはずの一撃

しかし現実には負けたのは一夏だった

俺の予想では・・・

「それはバリア無効化攻撃を使ったからだ」

織斑先生が一夏に解説したい

一夏が負けた理由は俺が考えていた通りバリア無効化攻撃を使用したためだった

あれは確かに強力な能力だが自身のシールドエネルギーを攻撃に転用しているので相手が何もせずとも自分からシールドエネルギーをけずってしまうのだ

「いうならばその白式は欠陥機だ」

「え！？欠陥機！？」

自身の機体が欠陥機だという織斑先生にたいして反応する一夏

「いや、これは言い方が悪いな。そもそもISは完成などしていないのだから。お前の白式は普通のISに比べてはるかに燃費が悪いということだ」

「まじかよ・・・」

織斑先生の説明に肩を落とす一夏

でも実際問題一夏の「白式」の能力は高い

おそらく俺の”あれ”をも貫通する能力を持っているのだからな

「まあ、そもそもお前は初心者だ。これからはISを何度も展開し

なれていくんだな」

そう締めくくる織斑先生

その後山田先生からあほみたいな厚さのマニュアルを受け取っていたなんでも校内でのISの展開などに関するルールブックのようなものらしい

「さて、次は霧生の番だな。準備はできているのか？」

俺にそう聞いてくる織斑先生

「ええ、一応はできてますよ」

「なんだ、うかない顔をしているが？」

「そりゃそうですよ。とばっちりのせいでまだ完全にはできてないこいつ（鋼）を使わなきゃいけないんですから」

俺はそう返した

「まあ、データをとるいい機会だろう？」

にやりという表情で聞いてくる織斑先生
確かにそうなのだが面倒なことに変わりはない

「はあ・・・ではいつてきますよ。おいで、鋼」

俺がそういうと首から提げていた銀のネックレスが光ISが展開される

全体が黒く間接の部分までも装甲で覆われ顔にもヘッドギアのようなものをつけている

間接の部分にはぶい銀の色をしていてどこか鎧を思わせる

「それがお前の・・・」

「はい。俺の専用機 鋼 です」

俺はそういつとアリーナに出て行った

絶対の防御力（前書き）

今回はいよいよ風の戦闘シーンです

戦闘シーンの描写は短い上に下手ですがどうかそこは温かい目で見てください

絶対の防御力

俺が織斑先生に返事をしてアリーナに出るとそこには先ほどの戦闘で一夏を下したオルコットが空中で待機していた

俺がアリーナに現れてのを確認したオルコットはどこか申し訳なさそうな感じで俺に話しかけてきた

「お待ちしておりましたわ、霧生さん」

教室で男子を見下して一夏に喧嘩を吹っつけた人物と同一人物とは思えないほど穏やかな口調でその態度にも俺を見下すような様子は見受けられなかった

しいて言うなら「戸惑い」だろうか？そんな感情が見て取れた

「どうかしましたか？」

俺が不思議そうに見ているのに気づいたのかオルコットは俺に話しかけてくる

「いや、ずいぶんと雰囲気が違うからな。驚いた」

「それは・・・すみませんでした」

オルコットは素直に謝罪する
本当に何かあった？

「いや、俺自体は特に何もいわれたりしていないから別にいい。それはそうと何かあったのか？」

俺は気になっていることをきいてみることにした

まあ、俺の予想では一夏との間に何かあったとしか考えられないが

「わたくしは先ほど試合で男の”強さ”というのを見ました。世の中の男のすべてが女性に対してこびへつらう存在ではないことを実感させられましたわ」

「そうか。やはり一夏だったか・・・」

俺は若干あきれを含んだ口調で言う

俺は一夏とそこまで親しいわけではないがこの1週間あいつを見ていた限りでは一夏は天然のフラグメーカーの才能を持っているのだろう

あいつは無自覚に人に優しくするからな・・・

それでおちる女子は多いようだ

いつか後ろから刺されてNICE BORTにならなければいいが・
・

「ええ・・・／／／／」

オルコットの様子を見る限り間違いなくおちているだろう
はあ・・・

誰とどういう関係になろうとも俺はどうでもいいが少なくとも俺にとばつちりで面倒ごとが降りかかるのだけは勘弁してほしいな
具体的にいえば織斑先生の愚痴とか愚痴とか愚痴だ

「で、どうする。俺とは試合するのか？」

俺はこのままでは埒が明かなくなりそうなので確認することにした
このままだといつまでたっても状況は変わらないからな・・・

「ええ、これはクラス代表を決定する試合ですので」

俺の問いにオルコットはそう答える
どうやら試合はするらしい

ただこのまま試合しても俺にメリットないんだがな
だってもし俺が勝ったら俺とオルコットは1勝1敗で並んでしまう
もしそうなって場合さらに面倒になる可能性が高い

俺が負けてもなんかあとからそれをネタにあの生徒会長とか生徒会長とか生徒会長にいじられそうなので負けるわけにも行かない

俺どっちに転んでも面倒ごとに首突っ込むよな・・・

はあ・・・

まあいい

今は試合に集中するでしょう

「じゃ早速はじめるとするか」

「そうですね」

「ところで、先ほどから気になっていたのですが・・・あなたのISは全身装甲なんですか？」

俺のISについて気になったのだろう

俺のIS 鋼 は広域殲滅と絶対の防御、そして指揮能力の3点を

徹底的に追及した機体である

そのため絶対防御ではなく全身を特殊な装甲で覆っている

そのため機動力は全機体の中で最低の部類に入るだろう

それを緩和するためのエナジーウイングなのだが・・・

『話はまとまったようだな。ではこれより霧生風対セシリア・オルコットの試合を行う。』

俺たちの話がまとまったのをみて、個人的にはいろいろと考えているのだが、織斑先生が告げ直後試合開始のブザーが鳴った

「では、行かせてもらいますわ！」

オルコットは試合が始まると一夏のときと同じようにスターライトを打ってきた

当然いきなりの奇襲なのでよけられないだろうと思っていたオルコットだがその予想は外れた

「じゃ～ね～」

スターライトが打たれたその瞬間すでに風はその場にはいなかった

「！？どこに！？」

すぐさまISのハイパーセンサーで探すが風の姿はどこにもない

「消えた!？」

「風のやつどこにいったんだよ!？」

「・・・・」

ピットから試合をモニターで見ていた一夏たちは突如消えた風に驚きの声を上げる

ちなみに今の発言は上から順に箒、一夏、織斑先生である

山田先生は驚いて声も出せずにいた

それからさらに10分が経過したがいまだに風の姿は捕捉できずにいた

試合開始のブザーが鳴るまでは確かに空中、それもオルコットの視界にいたはずの風

しかし開始と同時に姿を消し今の今まで捕捉できずにいる
これは異常な事態だった

「ああ、もう!!どこにいったんですの!？」

オルコットはいらだっていた
それもそのはず

試合開始と同時に放った射撃をかわされたのならまだしも捕捉すら

できなくなったのだから

だがそんな状況は突如一変した

いきなりオルコットの真下から赤黒い極太のビームが発射されたのだ

突然の事態に対応できずオルコットはそのままアリーナのシールドに一番上まで吹きとばされた

「つつう・・・これはいったい？」

絶対防御では防ぎきれなかった衝撃を受けたオルコットは自身に何が起こったのかを確かめようとさっきまで自分がいた真下をみた

「なっ！」

そこには試合開始同時に姿をけしいまのいままで捕捉できなかった
屈がいた

凧は試合開始と同時に鋼に搭載されている機能の一つを使用していた

「ミラージュコロイド」

ありていに言えば周りのいろや景色に溶け込み自身の姿を見えなくする能力である

その鋼に使用されているそれはISのハイパーセンサーをもってしても探知できないため作業の時間が必要だった凧はすぐさまこの能力を使った

凧のしたかった作業

それは”絶対守護領域”の調整だった

アリーナに出た凧はすぐに鋼のエネルギーウイングの不調に気づいていた

やはりまだ未完成ゆえにこのまま飛行しているのは危険だったのだ
さすがに凧や簪ががんばったとはいえ、やはり1週間という時間では戦闘に耐えうるレベルまでの調整はできなかったのだ

するとどうなるのか

凧は空をとべないのである

相手が空中にいる以上自分も飛べなければ不利

さらには癖がわかったとはいえあの自立行動兵器はかなり厄介だった

ではどうするのか？

交わすのが困難ならば防げばいい

凧はそう考えたのである

この機体”鋼”には絶対の防御領域を展開する能力がある
しかしそんな便利なものがそう簡単に使えるはずはない

絶対守護領域を張るにはそのつど展開する範囲、時間などを逐一計算して展開する必要がある

そしてそれには戦闘する場所の環境データを打ち込む必要があった

いままでは屋外の制限されていない環境を想定して開発されていた
が今いるのはアリーナ

周りをシールドで囲まれ上にも下にも空間の制限がなされている

そのままではこの能力を使うことができなかったのだ

だから風は姿を消しそのままでその環境データを入力していたのである

「大丈夫かい？」

風は自身の攻撃を受けて吹き飛んだオルコットに声をかける

声をかけられたオルコットは困惑した様子で風に答えた

「ええ、なんとか・・・それにしてもいままでどちらにいたんですの？」

当然の疑問をぶつけてくるオルコットに対して風は答える

「ずっとこのアリーナの地面にいたよ。さっききみに攻撃するまで俺はずっと同じ場所にいた」

「でも、ハイパーセンサーには何の反応も・・・!!」

俺の答えに対して納得ができないのかさらに聞いてくる

「まあ、姿が見えなかったのはこいつの能力のひとつだ。ちなみに今まではこいつの能力の調整をしてたんだよ」

「

はあ・・・ところであなたは空を飛ばないんですの?」

疑問はとりあえずおいておいて俺が飛んでいないことに対しての疑問を口にした

「まあね。今こいつの飛行ユニットが不調というか未完成でね」

「・・・そんな状態で勝負になると?」

「別に飛べないから勝てないというわけではないさ。それに俺はこの状態で君に勝つために今まで姿を消していたんだよ?」

「・・・また姿を消して奇襲するおつもりですか?」

卑怯だと言いたげな表情で聞いてくる

「まさか、そのつもりならこうして姿を現したりはしないよ。ようやく調整が終わってね。これからが本番さ」

俺はこともなげに告げる

「そうですか。では私もここからは本気で参りますわー!!」

そういうとオルコットは自身の機体と同名の自立行動兵器を四機射出し俺を全方向から取り囲む

「くらいなさい!!」

ビツトからビームが俺に向けて発射される
タイミング的に交わしがない攻撃

しかし俺には効かなかった

「な!?!きていないんですの!?!」

驚きの声を上げるオルコット
アリーナ内も何が起ったのかわからないようだった

「これが俺の機体 鋼の最大の能力『絶対守護領域』」

「絶対守護領域?それは何ですか?」

オルコットが聞いてくるが俺はそれに答えるつもりはない

「教えないよ。今は試合中だ、あいての自分の手の内をさらすやつがどこにいる？」

「・・・そうでしたわね。その能力は私の攻撃を無効化するようにです。ですが!!」

そついうとオルコットはビットから再度ビームを放ち自身もスターライトを打つ

どうやらビットとの並行使用ができるようになったらしい

だがそんなオルコットの猛攻も風にはきかない

先ほどいつていた『絶対守護領域』により完全に防がれいまだシルドエネルギーを減らせていなかった

「くっ！なんて硬さですの!?!」

オルコットはエネルギーが切れたビットを戻しながらそついった

「それは光栄だね。でもいい加減疲れたから終わりにするよ」

「??？」

凧はそういつと自身の展開していた絶対守護領域けすと胸部にある発射腔を開いた

そこにはプリズム状に凝固させた特殊な液体金属が装填されていた

凧はそれをオルコットのいる方向ではなくアリーナの重心に向けて発射しさらにそれを追うように高威力のビームを胸部から発射した

液体金属に向けて発射されたビームはそのまま直撃

そして次の瞬間にはビームが乱反射しそのビームがすべてオルコットに向けて襲い掛かってきた

「くっ！？こんなことが!？」

何とかかわそうとするが何せ反射の範囲が尋常ではなく逃れることはできずにそのまま直撃

シールドエネルギーは0になった

『そこまで！勝者・・・霧生凧！』

こうして今回の試合は俺の勝利となった

絶対の防御力（後書き）

感想などよろしくお願いします

主人公紹介（前書き）

今回は主人公の紹介です

ちなみに主人公の外見は急に変わることがあります

主人公紹介

主人公

霧生 凧きりゆう なぎ

歳 15

クラス 1 - 1

目の色髪の色ともに黒の典型的な日本人
幼いころに両親が自殺しておりその後は更識家に厄介になっていた
両親の件については不明な件が多く本人もそれについては知らない
ようである

そこで簪、本音と親しくなった。

倉技研に配属してからは家に帰らず倉技研に住んでいた

その間音信不通

非常に穏やかな性格で基本的に怒らない

幼少の頃より周りから疎まれてきたために本質に孤独がありそれが
世界を変えろという行動につながっている節がある

IS学園入学時に倉技研をやめている

> i 3 3 8 4 0 — 4 0 9 3 <

専用機

名前 鋼

凧が開発した次世代型ISで凧の心の移し身とも言える存在

もともとは「打鉄式式」で簀の専用機の予定だったが凧が起動してしまつたため凧の専用機になる

その後凧による改良が加えられ今の”鋼”になつた

全体が黒で間接の部分が銀色の全身装甲

第三世代のイメージインターフェースの応用による思考トレースシステムを搭載する

絶対守護領域の展開範囲計算、拡散構造相転移砲の反射角計算などを自分でやらなければならないため、優れた状況判断力と演算処理力が重視となる機体

待機状態は銀のネックレス

武装

長距離高エネルギー砲「ハドロン砲」

両肩にそれぞれ一機ずつ砲門をもつ高威力のエネルギー砲

その名のとおりハドロンをつかつたものであり長距離の敵であつても問答無用で撃墜する

「拡散構造相転移砲」

胸に搭載されたプリズム状に凝固させた特殊な液体金属を追うように高威力のビームを発射することで、広範囲にビームを乱反射させ長距離かつ広範囲の標的を一度に殲滅する兵器・拡散構造相転移砲が搭載されており、攻撃力・防御力に優れた最高クラスのスペックを獲得している。なお、拡散構造相転移砲は液体金属を用いない一点集中砲撃も可能

レールガン「クスイファイアス」

両サイドスカートに付けられた本機唯一の実弾装備

威力はほかのものに劣るが弾速が早く威力も第三世代兵器より高い

次世代試験飛行ユニット「エナジーウイング」

この機体の最大の目玉

エネルギーを使ってスラスターを動かし飛行する今までの常識を覆すもの

エネルギーそのものを羽の形に固定することで従来のものとは比べ物にならない安定性と飛行速度を誇る

また、それ自体非常に硬く自機にまとわせて防御することもできる
いまはまだ未完成であるが完成すればウイングそのものからエネルギー弾を射出することも可能になる予定

「絶対守護領域」

全方位エネルギーシールド・絶対守護領域を機体周囲に展開し、全方位からの一斉射撃や至近距離からの自機の拡散構造相転移砲をうけてもびくともしない絶対の壁

「マルチロックオンシステム」

試験的に組み込まれたシステム

本機の全武装を同時に使用し広範囲の目標を一度に狙い打つ

それぞれの目標にたいして起動予測などをしないとイケないため扱いが難しいシステム

主人公紹介（後書き）

どうでしょうか？

- 兵器を書いたことがないので鋼は完全にお絵かきになっています・

*12月9日に絵を削除、性能を一部修正しました
できれば感想がほしいです

代表決定と新たな専用機（前書き）

今回は若干いつものに比べて短いです

いつも短い？すみません・・・

ではどうぞ

代表決定と新たな専用機

代表決定戦の次の日のHR

クラス代表の名が山田先生の口から発表された

「では、一年一組の代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がり
でいい感じですね！」

そう、俺のクラスの代表は一夏に決定したのだ

試合の結果は一夏が一敗でオルコットが一勝一敗、俺が一勝という
結果だった

ここで分かるように一夏はクラス代表になる要素はない
だが一夏が代表に選ばれたのには理由があり・・・

「先生 質問です」

一夏が手をあげて山田先生に質問する

「俺は昨日の試合に負けたのになんで俺がクラス代表になっているん
でしょうか？」

「それは・・・」

山田先生が説明しようとしたのを遮るようにオルコットが説明しだす

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

なんとも偉そうにいうオルコット
だがオルコットの説明はまだ続き

「まあ、勝負はあなたの負けでしたが、しかしそれは考えてみれば当然のこと。なにせわたくしセシリア・オルコットが相手だったのですから！」

なんとも上からなご意見である

まあ、たしかに試合は一夏の負けだったが勝負は一夏の勝ちだったといえるだろう

あのときの一夏の最後の一撃は確実にオルコットをとらえていて、当たれば確実に一夏の勝ちだった

結果は一夏の自滅だったが本人は勝った気がしなかったのだろう

まあ、それだけが理由ではないようだが・・・

「それでまあ、わたくしも大人げないまねをしてしまったと反省しまして・・・」一夏さん”にクラス代表をお譲りすることになりました。やはりIS操縦者には実戦がなよりの糧。クラス代表ともなれば戦いにはことかきませんもの」

と、なんともそれらしい理由を並べてはいるものの本心は訓練としてようして一夏といられるからだろう

だってさっきの言葉の中で”一夏さん”と名前で呼んでいたからな

「オルコット」セシリアとお呼びくださいですわ」セシリアのほうはわかったけど風はどうなんだ？お前も推薦されてたしセシリアに勝ってるだろ？」

まあそう聞いてくるわな

「まあそうなんだがな。残念なことに俺の機体はまだ未完成でな、無理して使ってみたがもしそれで壊れたら元も子もないだろ？いつ完成するかもわからないから俺が代表になるのは無理なんだよ」

そう

俺の機体 鋼 は昨日の試合で確認したようにエナジーウイングの調整が完了していない

それに武装もまだ未完成で昨日オルコットに打ったビームも威力が足りなかったし先制につかったハドロン砲もエネルギー変換効率が悪く未完成である

つまるところ実戦投入はできないのである

本音を言えばめんどくさいというのと簪の機体の開発で忙しいというのもあるが・・・

「まあ、がんばれや一夏。俺は応援してるよ」

俺はそういつて会話を終わらせた

なんかその後オルコットと篠ノ乃がもめて織斑先生にありがたい出席簿アタックを受けていたようだが気にしないことにした

だって関係ないし

IS学園整備課

今そこには霧生凧、更織簪、布仏本音の三人がいた
ちなみに時間は午前の授業がやっているであろう10時である
早い話がこの三人は先ほどのHR（簪は別のクラスである）の後そのままだここにきているのである

つまりは授業をさぼっている

「本音・・・本当にいいの？今は織斑先生の時間なんじゃ・・・？」

「んゝいいんじゃない？なつちゃんに手伝いだし」

少々気が弱そうに聞いた水色の髪の少女が簪

それに気の抜けたような返事を返した少女が本音である

「俺はここで授業中に何しても干渉しないっていう条件でここに来てるからいいんだよ。それに簪と本音は手伝いつてことにしてるから大丈夫だよ」

そう答えた少年が霧生風である

「それにしても大丈夫なの・・・？鋼・・・」

「うーん。まあ大丈夫なんだけど武装がねーそれにえなじーウイングの調整もまだまだだし・・・」

「でも、武装は使ってたよ？」

「使えるには使えるけどエネルギーの変換効率がまだ完璧じゃなくてね。このままだとすぐにガス欠だよ」

「エナジーウイング・・・のほうは？」

「それもまだ実戦は無理だねー固定化できても安定しないから安全に飛べないんだ」

なんとも行き詰った状態である

「とりあえず今は鋼の方は置いておくとして先に簪の専用機のほうを調整しようと思う」

俺がそう切り出すと簪はおどろいたように聞き返す

「・・・え!?!もう・・・出来てるの?」

「完成はしていないけど8割ってとこだね、武装全体はできてるんだけどこっちもエナジーウイング使うから」

そう言いながら風は簪の専用機のパネルを表示させる

「これが・・・私の専用機・・・」

「そう、現存するどの機体よりもスペックが高い俺の技術の集大成。 ”紅蓮”だよ」

「紅蓮・・・」

「へー赤いんだ、カッコいいよ」

それぞれが感想を述べる

「でも……こっちもエナジーウイングできてないんでしょ……？」

当然の疑問を聞いてくる簪

それに凧は苦笑しながら答える

「まあね、でもこの機体に使ってる武装はどれもこれも新技術でね、実戦データがないと調整ができないんだよ」

「それじゃあ使えないんじゃないの？」

本音がもつともなことを聞いてくる

簪はじつとこっちを見ている

心なしかその視線は期待が見え隠れしている

「いや、そうでもないんだ。エナジーウイングの開発が間に合わない場合を考えて一機だけ飛行ユニットを作っておいたんだ」

そついいながら凧はまた新しいデータを表示する

「“飛翔滑走翼”これが俺の開発した新型の飛行ユニット。出力、機動力ともにエナジーウイングには遠く及ばないが現行のどのスラストよりも早いと思うよ」

凧が見せたデータに移っていたのは凧の開発した新型飛行ユニット
”飛翔滑走翼”

普通のスラスタとは違い見た目はエナジーウイングに近い形をしている

違うのはエネルギーを固定化する方法をとっていないこと

「これがあれば紅蓮は戦闘ができるよ」

「でも・・・それなら凧の機体にも・・・それに初期化と最適化がまだ・・・」

「そうだよ」なっちゃんの機体も使えるんじゃない？」

「まあね」でもエナジーウイングを使わないと完全にできないし、あ、それは紅蓮もただこれの予備は作ってなくてね」それに鋼には絶対守護領域がある。だから別に飛べなくてもいい。でも紅蓮は鋼とは違って高起動機体だからね」データを取る上でも戦闘できないとだめなんだよ。それと初期化と最適化はもともと完了してるから気にしないでいいよ」

「そう・・・凧と戦えないのは・・・残念・・・」

「わたしもなっちゃんの戦ってる所見られないのは残念だよ」

「まあ、そういうなよ。簪のデータがあればエナジーウイングの開発も進むと思う。だから頼めるかな？」

「うん・・・!!」

凧の言葉に簪は肯定で答える

「頼んだよ」

凧は笑いながら簪にいう

「で、これからどうするの？」

本音は今回ここにあつまつた理由を凧に聞く

今回ここに授業中にあつまつた理由はまだ凧から知らされていないかった

「ああ、そういえばまだ話してなかったね。今回ここにきてもらったのは簪に紅蓮を渡して最終調整をするためだよ」

「最終・・・調整・・・？」

「そ、紅蓮にはもう飛翔滑走翼をつけてあるからあとは実線で武装の調整をすれば紅蓮は使えるようになる」

「わかった・・・」

「で、わたしはなにをするの？」

本音は自分がここに呼ばれた理由がわからないらしい

「本音には訓練機のラファールで簪の模擬戦の相手をしてもらいたい」

「わたしが？」

本音は自分でいいのかという表情を浮かべながら凧に聞く

「紅蓮のことはまだ知られたくないからね。俺の機体はまだ出せないしデータの整理とかを俺はしないといけないからね。頼めるのは本音しかいいないんだ」

「うん、わかったよ。がんばる!!」

「簪もいい?」

「もちろん・・・」

こうして三人がいだれもないアリーナで簪对本音の試合が行われることになった

代表決定と新たなる専用機（後書き）

感想などお願いします

本当によんでいただけたなら一言でもいいので感想を書いていただけるとうれしいです

あとついでに評価も

では次回もがんばった参ります

模擬戦 簪VS本音（前書き）

とりあえず読む前に一言

どうしてこうなった・・・？

模擬戦 簪VS本音

簪の専用機”紅蓮”

その性能実験と最終調整のために模擬戦をやることになった

相手は布仏本音

生徒会の書記にして今回の主役 更識簪 の専属従者である
本人は整備課希望なためISでの戦闘は今回が初めて・・・ではな
かったりする

もちろん二人ともIS学園の入試において教官との戦闘の際にIS
を使っている

結果は二人とも快勝

二人は本来暗部に属する者たち
それゆえにそういったことに対しての訓練はぬかりない

というわけではなかった

理由は簡単

今回の紅蓮の開発者”霧生凧”の影響である

霧生凧、更識簪、布仏本音、この三人は幼馴染である

凧の両親が自殺し、凧が天涯孤独になってしまった時に更識家は凧を引き取った

凧の両親はもともと研究者であった

ISの登場によりその立場を否定された二人は自殺してしまったものの腕は一級品であった

それは暗部の名家である更識家が認めるほどであった

それゆえに更識家はこの少年を引き取ったのだ

「将来必ずや大きなことをする少年である」

それが更識の意見であった

実際凧はその才能と知識への貪欲さからISの技術を今の第三世代に引き上げ若くして倉技研の立場ある存在へと上り詰めた

更識家の予想通りに

だが本人はそれをあまり更識家を当初快く思っていなかった

自分の能力の恩恵を得たいがために行動する蠅ども

それが凧の更識に対する当初の認識であった

しかしそこで出会ったのが「更識簪」と「布仏本音」であった

この二人は何の打算もなく自分に接してくれる

いままでそのような存在が身の回りにいなかった凧にとってこの二人との出会いは幸運であった

だがそれは凧に限った話ではなかった

「更識簪」はその当時姉である「更識風音」（さらしき かざね）
いまの「更識楯無」との才能の差に悩んでいた

その才能ゆえにどんどん実力をつけていく姉

そもそも簪は生まれたその時から姉とは区別されてきた

ISが生まれた世界の主流になった時からISの適正試験をされた
更識姉妹

あんである楯無は自分よりはるかに高いAランク

それに比べて自分はぎりぎりのCランク

更識家では出来のいい姉 出来の悪い妹

そのように扱われてきた

簪はヒーローアニメが好きだった

ピンチの時にはかならずかけつけて助けてくれるヒーローが好きだった

そして自分を助けてくれるヒーローを求めていた

それが引き取られてきた少年霧生凧であった

自分が一番困った気には必ずそばにいてくれる

自分が困って泣きそうな時に必ずそばにいてくれる

簪にとって霧生凧とはまさに自分が求めていたヒーローだった

それは本音についても同じだったようだ

本音は最初は自分の主を笑顔にしてくれる存在という認識だった

自分にできなかったことをやってくれる

自分ができないことをたやすくやってのける

感謝という感情は次第に憧れへとかわった

凧は誰に対してもやさしいわけではなかった

どちらかといえばかなり不親切であつた

だが凧は自分に気をつかつてくれる

やさしくしてくれる

憧れが疑問に変わっていった

そしてある日本音は気づいた

凧は不親切なわけではない

諦めているのだ、と

自分を取り巻く世界にあきらめている

自分のやりたいことしかやらないのは誰も自分を見てくれないから
なのだと

実際凧は幼少の頃より天才であつた

それゆえに孤独で

それゆえに誰も彼を理解できなかった

凧は意識していないのかもしれないが彼が笑う時

そこに寂しさを本音は見た

だから気づいた

この男の子は心から笑えないのだと

ところで泣いているのだと

自分を見てほしいのだと

疑問は氷塊し

その心は恋に変わった

そんな二人にとって大事な存在である凧がある日家から消えたのだ

書置きもなく

突如

二人は泣いた

時間さえも感じないほど心が閉じてしまった

だがそんなとき姉である楯無から二人に風の情報が入った

その時更織は風の方について調べていなかった

また、そのような命令も出してはいなかった

当時姉はまだ楯無をついでいなかった

なのに風の情報を持ってきた

そう

楯無、風音は独自の情報をかき集めてきたのだ

それこそ死に物狂いで

誰でもない

妹である簪のために

自分の持ちうる力

そのすべてを使って

それから簪は姉にたいして確執を持つことはなくなった

姉よりもたらされた情報は

”霧生凧はIS整備士の試験をpassした”というものだった

そこで二人は考えた

自分たちもISにおいて力をつければ

また凧に会えるのではないかと

その後簪は姉との特訓により日本の代表候補生になり

本音はIS整備の勉強を姉である虚にならいその過程で自身もIS

戦闘の訓練をした

二人はそうしてIS学園に入学した

試験のときの教官はかなり実力があつた

だが恋する乙女の力には勝てなかったらしい

二人はものの5分で勝利した

つまり二人はISでの戦闘に関してはかなり高い能力を持っている

簪は純粋な戦闘能力

本音はISのそれぞれのスペック、状態を的確につく頭脳的な戦闘能力

タイプは違えども二人の能力は同学年なかでは突出していた

ゆえに凧は自身の最高傑作を簪に託したのだが

さてここまでで分かったと思うがこの勝負どうなるかわからないのだ

簪が使うのは自身の専用機”紅蓮”

本音が使うのは量産機”ラファールリバイブ”

「じゃ、そろそろ始めるけど二人とも用意はいい？」

凧がアリーナで待機している二人へ確認する
ちなみに今アリーナには関係者以外いない

・・・ちゃっかり生徒会長は観客席でみているがまあ、生徒会長だからいいのだろう

「うん・・・」

「いいよ」

二人は準備完了を告げる

「じゃこれから模擬戦はじめるよ」

凧の言葉の直後試合開始のサイレンが鳴る

はじめに動いたのは簪

飛翔滑走翼をフルスロットルにして本音に奇襲を仕掛ける

「はあ！！」

本音を射程に入れると簪は輻射波動を拡散状態にして放射する

「ぐ……いきなりだねかんちゃん」

いきなりの奇襲と紅蓮の速さについていけずにもろに食らってしま
う本音

「でも、これからだよー!!」

本音はすかさず連装ショットガンをコール

両手に持ちそれをばら撒き打ちする

狙って打っているわけではないが両手から繰り出される弾丸の雨は
確実に紅蓮に当たる

「……くっ、でも……!!」

本音の攻撃に対して簪は輻射波動を拡散状態にして打ち消そうとする

「あまいよー!!」

本音はそういうと自身が持っていたショットガンを簪に向けて投擲
する

「!?!?……なんのつもり?」

簪は本音の行動がわからなかったが投擲されたそれは輻射波動によ
り粉碎され爆発する

「……これは!」

そう

爆発したショットガンにより視界がさえぎられる
本音はすかさず次の武装アサルトカノンをコール

視界がさえぎられているものの本音は先ほどの位置からおおよその
簪の位置を割り出し撃つ

本音の予測はあたり簪は被弾する

「・・・やるね！本音・・・」

「ふふふゝわたしだってやればできるんだよ」

簪の言葉に対して本音は自慢げに、誇らしげに答える
実際専用機を使っている簪に対して本音が対抗できるのはすごいこ
とである

いくら慣れていないとはいえ簪の紅蓮は世界最高

それに対して本音のほうは量産機

本来なら勝負にならないはずである

しかし実際はかなりいい勝負になっている

「なら・・・これで！」

簪は近接用武装呂号乙型特斬刀で切りかかる

「まけないよ〜！」

本音も近接ブレードを展開して迎撃に移る
二人は強烈なつばぜり合いおこす

先に離れたのは簪

呂号乙型特斬刀を消して輻射波動での攻撃に移ろうとする

「逃がさないよ〜！」

本音はそれを見逃さず五五口径アサルトライフを展開
簪め向けて撃つ

突然の攻撃に対して簪は対応できない

「・・・きゃ！・・・っ」

簪のシールドエネルギーはかなり削られる

本音はその間も武装を展開しては撃ち収納しては展開し撃つ
その間はコンマ一秒にも満たない早業

”ラピッド・スイッチ”

本音はその技術を習得していた

絶え間ない弾幕に簪は攻撃する機会がなくひたすらにかわし続ける

簪のシールドエネルギーはどんどん削られていく

試合開始から15分

すでに簪のシールドエネルギーはつきかけていた

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

シールドエネルギーだけではなく簪の体力も限界に近かった

絶え間なく襲い掛かる弾幕の雨

それをかいくぐり続けるのは容易なことではない

「このままじゃ・・・負ける・・・」

簪は戦意を失いかけていた

凧から専用機をもらったにもかかわらず自分はそれを生かしきれない

簪はわかっていた

自分の反応速度が紅蓮の反応速度に追いついていないことに

反応速度に体がついていけないことに

ふがいなさを感じていた

凧は自分を信じてこの機体をくれた

でも自分のせいでそれを生かせないでいる

そしていま・・・負けようとしている

いやだ・・・負けたくない!!

凧がくれたこの機体を生かせないまま負けるなんて・・・

私は・・・

負けたくない・・・!!

”最適化完了 神経接続開始 操縦者認識完了 操縦者 更織簪”

簪が負けたくない強くおもったときそれに答えるかのように紅蓮が最適化を完了させる

本来ISとは初期化、最適化を完了させることで専用機になる

だがこの紅蓮は最初からそれが終わっている

では・・・なぜ？

『あゝ簪 聞こえる？』

簪が疑問に思っていると凧の声が聞こえる

「聞こえてるよ・・・で、なに・・・？」

『そろそろ最適化が終わったと思うんだけどどうかと思ってね』

「最適化・・・？それは最初にすんでるんじゃない・・・？」

凧は最初に初期化、最適化はすんでいるといていた

ではなぜ今になって最適化が終わったなどというのだろうか？

『あゝ言葉が悪かったね。システムがそろそ簪を認識して簪用に書き換えらら他と思うんだ。いうなら最良化。で、どう？』

「それなら・・・今」

『そっか。さっきまでは俺を想定したものだったからたぶん反応速度が過剰すぎたと思うけど、それならそこが緩和されてるはずだよ』

「わかった・・・いくよ、本音・・・！」

簪は確かめるべくサ再度本音に向かっていく

「忘れられてるのかと思ってたよ・・・」

本音は先ほどから自分が会話に出てこないめ忘れられていたのではないかと涙目であった

それでも絶え間なく弾幕を張るあたりさすがだろう

だが先ほどまでとは違い最良化がすんだ紅蓮はそれを難なくかいくぐる

「すごい・・・機体が・・・私についてくる・・・！これなら・・・いける！！」

簪はさっきまでとは打って変わり攻勢に出る

先ほどまでとは違いスピードも動きの切れも各段によくなった起動を本音追いきれない

そして・・・

「はああああ！！」

簪の右手が本音のシールドにあたり本音を吹き飛ばす

簪はそのまま輻射波導を長距離モードに変え収束させたそれを本音に向けて放つ

ふきとばされ動けなかった本音はそれをもろにつける

そして本音のシールドエネルギーはつきた

『そこまで！勝者 簪！』

簪对本音の恋するおとめの対決は簪の勝利に終わった

結果

簪残りシールドエネルギー56

かなりきわど結果だった

本音も専用機だったら試合の結果は逆だったかもしれない
思わぬところで本音の実力をみた貴重な試合だった

「あれ？私の出番は？おねーさん泣いちゃうぞ？」

そつえばいましたね生徒会長

模擬戦 簪VS本音（後書き）

はい、なんともうすみませんでした

なぜか書いているうちに本音がなんか強くなりすぎた感があります

今後どうして行こうかいま思案中です・・・

感想などありましたら気軽に書いて下さい

ヒロインズ紹介（前書き）

今回はヒロイン達の紹介です

原作とは違う点があるので読んでみてください

イラストも描いていますが・・・下手です

ヒロインズ紹介

この作品では原作とは違うor原作ではわからないところを勝手に作っています

変更点

ISが登場した年
今から9年前で風が6歳の頃
原作での一夏がさらわれたとされる時期なども今後変わる予定
作者が原作を読んだことがない上にアニメも流してみていたためこ
ういう設定になります

更識簪

> i 3 3 8 5 6 — 4 0 9 3 <
原作では姉にたいしてコンプレックスを抱えていたがその設定がない
専用機も自作していない
日本の代表候補生

布仏本音

> i 3 3 8 9 6 — 4 0 9 3 <
原作同様の設定だが若干性格が黒くなっている
笑顔での威圧が怖いです!!

更識楯無

> i 3 3 8 5 6 — 4 0 9 3 <

原作同様にロシアの代表候補生で専用機は「ミスティアスレディ」だが

機体の整備、改良を凧に一任しているため原作よりスペックが高い原作にあった簪との確執はなく最近凧に好意を寄せている様子それゆえに若干簪との間に不協和音が生じることも・・・

オリジナル専用機紹介

「紅蓮」

凧が簪のために開発した世界最高の機体

全体的に赤く間接の部分が金色の全身装甲

右手に悪魔を思わせる大きな爪状の手が付いており左右対称ではないISの常識を覆す存在で初期化と最適化をすでに済ませていた（というより其の概念が存在していない）

一次移行、二次移行などによる機体の変化および概念が存在しないこれは凧が紅蓮のコアを書き換えたためである

最良化という独自の進化方法を持ち使うたびに操縦者に合わせたプログラムに自分で書き換える

特殊なAI機構”無段階移行機能”を搭載している
操縦者との同調率が上がるほど出力が上がる

現在の稼働率30%

武装

徹甲砲撃右腕部「輻射波動」

高周波を短いサイクルで対象物に直接照射することで、膨大な熱量を発生させて爆発・膨張等を引き起こし破壊するというかなり強力

な武装

ISにはシールドと絶対防御があるため直接的につかんだりすることはないが相手の刀剣などの武装に対して絶対的な強さを持つ
放射波動はビームのように遠距離への攻撃、ワイドレンジでの広範囲拡散攻撃、放射波動砲弾を円盤状に収束させてカッターのように用いるなどのバリエーションを持つ
本機最強の武装

「飛燕爪牙」

両肩にそれぞれ一機ずつ内蔵されている
別名スラッシュハーケン

切断力に優れておりおもに接近にたいするカウンターなどに用いられる

近接用発展型ブレード「呂号乙型特斬刀」

近接用ブレードの発展型

切断力が従来のものよりも格段に強化されビームコーティングによりビームを切ることもできる

長さは従来のものよりも若干短く取り回しがしやすい

飛行ユニット「エナジーウイング」 「飛翔滑走翼」

本来ならエナジーウイングを使うはずだったが未完成ゆえに代用として飛翔滑走翼を装備

想定より劣るもののそれでも現行のどのISよりも速い

対抗戦開幕と敵襲（前書き）

今回は正直いまいちなです・・・

それと次の更新は早くても12月です

作者の学校で来週に微積のテスト

30日から中間があるためテスト勉強します

気長にお待ちください

対抗戦開幕と敵襲

あのクラス代表決定戦から早一ヶ月

代表にとつてははじめての仕事「クラス対抗戦」の日がやってきた

俺たちのクラス1-1の代表は、不運なことに代表になってしまっ

た男 織斑一夏

代表決定戦からのこの期間

どうやらそれなりに特訓はしてきたらしい

ただ・・・正直ものになっているかはかなり怪しいといえるだろう

なぜならその特訓の相手が篠ノ乃箒とセシリア・オルコットの二人だからだ

この二人、一夏にほれているらしく自分から特訓の相手を買って出たらしい

それ自体はいいことだ

篠ノ乃は剣道の有段者

ISとはその特性上、操縦者には反射能力などが多く求められる
それゆえに剣道とはその反射能力、さらにいえば一夏の白式は近接
用に武器しかないためそこでも剣道は大きな力になるだろう

対してオルコットは射撃戦を得意とする”ブルーティアーズ”を専用機とする代表候補生
射撃武器使いということはそれだけその性質を理解しているということ

射撃武器に対してかわすしかない一夏はよりその特性を理解しなければならぬ

また、オルコットは代表候補生

一夏はISが動かせるとはいえ完全な初心者
そいつって面でもオルコットの指導は一夏のやくにたつだろう

・・・と本来なら喜ぶべき状況なのだが現実には違った

この二人は教え方が下手すぎる

篠ノ乃はなにやら擬音だらけでわかりにくい

というかわからない

本人は自分の感覚を伝えるだけ

といつかそもそも篠ノ乃はISを勘のようなもので動かしている

つまりは何一つとして理解できていないのだ

それゆえにわかりやすく教えるなどできるはずもなかったのだ

それに比べるとオルコットはまだわかりやすいのかもしれない

なのだが・・・ことらもかなり問題がある

オルコットの場合は逆に理論的にISを動かしすぎている

ISの理論、原理、そういったものを本当にそのままmとらえ実践する

上昇、下降にしてもそれは同じで感覚的な表現、とはいえ篠ノ乃はあまりにもあれだが、いいところまで理論的に解説してします

確かに間違っていない

確かに正しいのだが一夏に理解させるのは不可能だろう

一夏はISについての知識がありえないほど持っていない

織斑先生のせいなのかもしれないが一夏はここに入るまではISに

ついでの情報は何一つ見せてもらえなかったらしい

まあ、本人もそこまで興味はなかったらしいが・・・

それゆえに代表候補生や専用機

そういつたこの世界においては常識といえることすら知らなかった

・・・入学前に参考書を電話帳と間違えて捨てたのが最大の原因だが

と、そんなわけで二人の指導はあまり一夏には効果的ではないようだ

その証拠にこの前のISの実技授業

そのとき専用機持ちはISの展開、急上昇、そのまま下降し地上10センチのところでの停止について実技があった

その実技において一夏は下降のとき見事に減速できずそのまま地面に激突

グラウンドにおおきなクレーターを形成したのだった

本人曰く「グツとする感じでやっただけだな・・・」などといっていたためやはり効果的ではないのだろう

え？その時俺はどうしてたのか？

もちろんいましたよ授業に

鋼は調整中だったため実技には参加してなかったけど

とまあそんな感じで一ヶ月は過ぎていった

その間に中国からの代表候補生がきたり、その代表候補生が一夏に幼馴染だったり、それで部屋の問題が起きたりといろいろとあったらしいが俺は完全にスルーしておいた

自分の立てたフラグぐらい自分でなんとかしろ

というのもあるがこちらもいろいろとやることがあった

クラス対抗戦

それはつまり各クラスの代表が試合を行うというもの
そして簪もクラス代表の一人に選ばれていた

そのため簪の機体 紅蓮 の調整をしなければならなかった

模擬戦において最良化により簪の専用機になった紅蓮だがまだ完全ではない

わかりやすくいえばまだ最大稼動ができていない

紅蓮は世界最高に能力を持つ機体

それゆえにその能力に操縦者が追いつけていないのだ

だからこそ風はISコアを部分的に書き換え最良化という過程を書き加えた

風はISコアの解析はできていないもののそれが何であるかは理解できていた

ISコアとはすなわち”人工頭脳”であると風は確信した

初期化とは前の記憶を消去しまっさらな状況にする

最適化とは人口頭脳が操縦者を認識する工程

一次移行とは人工頭脳が操縦者を認めて進化を始めたということ

つまりは教科書などで教わるように操縦者とともに進化する

実際は操縦者の思考などを読み取り自我というものを形成し、情報を集め操縦者による近づくように進化する

それゆえに一次移行をした後の機体は操縦が楽になり能力も向上する

ISコアとはすなわち人工頭脳なのである

とはいえなぜそのようなものがあるのか

どうやって作られたのか

コアの内部の情報は何一つとしてわかっていなかったが・・・

紅蓮は完成した機体

もうこれ以上の進化はないという究極の機体だった

それゆえに進化は必要ない

だから凧は進化ではなく最良化を組み込んだのだ

そうすることで紅蓮は簪の思考などをよみとりより適したシステムを構築する

そうすることで稼働率が上がり紅蓮は強くなるのだ

と、いったことをやっていたため凧自身の機体は完全に手付かずの状態だった

今俺はアリーナでクラス対抗戦を観戦している

右隣には本音、左隣にはなぜか楯無がいた

そんな両手に花な状況では当然周囲の視線を集める

なんか周りからかなり興味の視線やら嫉妬の視線やらを浴びてかなり俺は参っていた

・・・なによりきついのは

『そんなに・・・おねえちゃんや・・・本音が・・・いいの?』

とプライベートチャンネルで話しかけてくる俺の後ろにいる簪だった
正直これが一番きつい……

なにかいうとなきそうになるし……

はあ……なんでこうなるんだ

俺がそんなことを考えているといよいよクラス対抗戦が始まった

今アリーナで対峙しているのは一夏と中国の代表候補生である鳳

なにやらやり取りがあるようだが遠目のためよくわからない

「ところで……あれは青竜刀か？」

「たぶんそうなんじゃないかしら？データでは双天牙月ってなってるわ」

青竜刀を二本くっつけたような武器が鳳のISの近接武器の様だった。

明らかに重いだろあれ……なんで片手で振り回してんだ？

鳳の攻撃を一夏は必死によける

実際当たったらしゃれにならんしなにより・・・

「あれが迫ってくるのは勘弁してほしいな・・・」

「おねゝさんも同感ね・・・」

「わたしも」

「私も・・・」

その長大さ、威力・・・視覚的迫力とはんでもないものだろう

しかも捌いてもすぐに次の刃が襲いかかってくるという波状攻撃

一夏は鳳から距離をとる

だが一夏に機体で距離をとるのはむしろ悪手なんじゃないか？

すると鳳の肩のアーマ開き、一夏が目に見えぬ力を受けて吹き飛んだ

さらに目に見えない不可視の力が一夏を地表へと叩き付ける

「あれは・・・衝撃砲か？」

「ええ、おそらくはデータにある龍砲でしょうね。空気を固めて飛ばすから見えない上に稼動範囲に制限がないからどこへでも撃てる」

「一夏にとってはかなりきついな」

一夏はなんとかそれをよけようとするがごとく吹き飛ばされてしまっている

たしかに見えない弾というのは厄介だが・・・

「でも、かわす方法もあるんだがな・・・」

「確かにね。でもそれを気づくかしら？」

「気づかなければ負けるだけだ」

「結構冷たいのね？おねえさん驚いわ」

楯無は対して驚いた風もなくいう

その際体を密着させてきたため左の本音からは腕をつなられ後ろの簪からは強烈なけりをもらった

・・・俺悪くなくね？

そんなこんなしているうちに状況は動いた

一夏は衝撃砲の攻略法を見つけ出したらしい

衝撃砲はもうほとんど当たらなくなってきた

だが鳳も代表候補生

衝撃砲を攻略されたとはいえ以前優位は揺るがない

すると一夏と鳳は一度空中でとまりなにやらやり取りをしていた

俺を含めなんだ？と思っていると突如一夏が視界から消えた

一夏は爆発的な速さで鳳に向かっていく

突然の事態に鳳が対応しようとするがそのときにはすでに一夏は鳳の懷にもぐりこみ雪片を振り上げていた

これはきまった

誰もがそう思いおれ自身一夏の勝利を確信した

だが突如アリーナ全体を揺らす巨大な衝撃、遅れてやってくる破壊音がアリーナに響いた

「これは・・・」

「ええ、敵襲のようね」

「ほんとだ」

「でも・・・なんでこのタイミングで・・・？」

狙ったとは思えない敵の襲来に簪は疑問を覚える

「おそらくは狙ったんだろう。今日是对抗戦だからな。データを取るなりするならこのタイミングだろう」

「私も同意見ね。で、どうするの？」

「とりあえずは様子見だな。楯無はいつでも出れるように待機しておいてくれ」

「あら？いきなり私を出すのかしら？」

楯無はいきなり自分を出すという風に疑問を持つ

「ああ、もしものときはお前が出るのがベストだ。それにまだ俺の機体は戦闘が困難だし敵がわからない以上紅蓮は出せない。悪いな、簪……」

「わかった……」

こうして対抗戦は思わぬ展開へ進んでいくのだった

全身装甲のIS（前書き）

なぜだろう・・・執筆している自分がいる

テスト死んだかな

全身装甲のIS

アリーナは騒然としていた

クラス対抗戦の最中に突如乱入してきた全身装甲のIS
全身装甲のISは凧ので一度見ていたためそれ自体にはおどろかな
った

驚いたのはそのISの持っている異常なまでの火力だ

そのISはアリーナのシールドを破壊して進入してきたのだ
このアリーナのシールドは凧の鋼の拡散層転移砲を受けても破壊ま
ではいたらない強度を持っている
それゆえに驚愕したのだ

まあ、ここに驚愕もしていなければ関心もあまりなさそうな者たち
もいたが・・・

「それにしても全身装甲とは・・・なんかパクリじゃないか？俺の」

「まあまあ、そんなことは気にしちゃだめよ？」

「凧のやつのほうが・・・かつこいい」

「そっだよ」

凧は全身装甲の敵ISを見て愚痴りそれを回りが慰める

ちなみに上から順に風、楯無、簪、本音の順である

周りは騒然としていて教師陣が避難誘導をしている

みんな混乱状態でなかなか避難が進んでいないようだ

アリーナでは進入してきた敵ISとそこで試合をしていた一夏と鳳が戦っていた

当人たちにも避難命令が出てはいるようだがどうやらその気はないらしい

というより見た感じ敵ISに二人がロックされているらしく逃げられないのだろう

さらにいえば進入する際敵ISが破壊した遮断シールドは再展開されておりそのレベルは4

アリーナへと続く扉もロックされているらしく教師陣も進入できずにいる

つまり二人は強制的に戦わなければならない状況を作られているのである

しかしこれはなにか作為的なものを風は感じていた

風ほどの能力を持つてすれば再展開された遮断シールドを破壊することもロックをすることも可能であった

一夏たちを救出することも容易であった

だが凧はそれをしなかった

「これは・・・狙いは一夏か俺ですね」

そう、凧は今回の敵襲は一夏か自分の機体データ、戦闘データと踏んでいた

そして今回の犯人はおそらくは・・・

「なんでそう思っのかしら？」

楯無は凧の発言に疑問を口にする

ちなみに本来ならば彼女も避難の誘導および自体の収集に動かなければならないのだ

だが楯無はまだ凧のそばにいた

「簡単な話だよ。俺は機体のデータをどこにも提示していない。知っているのはお前たちと倉技研の一部の人間のみ。データをほしがるのは当然でしょう。一夏はブリュンヒルデの弟、戦闘データはなんとしてもほしいだろう」

「なるほどね」だから出ないんだ？」

楯無は納得したように言う

「そういうことだよ。それに今回の犯人のめぼしはついてるしな」

凧はどこかあきれたような口調で言う

その表情はなんと微妙な表情をしていた

「誰・・・なの？」

簪はわからないように凧に聞く

本音もわからないといった表情で凧の返事を待っている
楯無は予想がついているようだったが

「おそらく今回の犯人は 篠ノ乃東 だろうね」

凧は答える

「え!？」

「・・・」

簪と本音は驚いたような声を上げ楯無は無言で話の続きを促している

「だってそうだろう? I Sには必ずコアが必要になる。コアの数を複製できない以上コアは非常に貴重なものだ。それを偵察用に、しかも”無人機”に使ってくるなんて正気ではないよ」

「無人機・・・?」

「それは本当なの!？」

簪は明らかに驚いたような表情で

楯無は珍しく声を荒げる

「気づいてなかったのか？あれ、攻撃するときのモーションがミリ単位で同じだよ。生体反応もないしな」

「でもISは人がいないと動かないはずじゃない？」

楯無は当然の疑問を口にする

そう、ISは人がいなければ動かない

それはISにおける常識

ISはあくまでもスーツであり動かすのはあくまでも人間なのだ

だから普通の人にはその発想はできないのだ

この発想が可能なのは凧のように常識を超える考えが可能な人物か

一夏のような馬鹿だけだろう

「織斑くん！凰さん！今すぐアリーナから脱出してください！すぐに先生たちがISで制圧に行きます！」

プライベート・チャネルを使って山田先生は二人に対して避難の指示を出していた
しかし一夏たちはそれに従わない

「え、食い止めるって・・・織斑くん！何を言ってるんですか！？」

山田先生はプライベートチャンネルにもかわらず叫んでいる
どうやらかなり余裕がないらしい

「織斑くん！？だ、ダメですよ！生徒さんにもしものことがあったらどうするんですか・・・ってもしも！？もしもし！？」

「もしもし！？織斑くん聞いてます！？凰さんも！聞いてますー！？」

「山田先生、どちらにしても無駄だ」

「無駄って織斑先生！？」

「いいからこれを見る」

織斑先生はブック型端末の画面を数回叩き表示されていた画面を切

り替える

「遮断レベル4に設定・・・のみならず扉までロックされて・・・まさか!？」

「そうだ・・・あのISの仕業でまず間違いない」

「織斑先生、避難に向かった先生方も、扉のロックによってアリーナに入ることが出来ないと・・・!」

「・・・これでは避難することも救援に向かうこともできないな」

織斑先生ら教師人はすでにどうすることもできなくなっていた

本人らに任せることにしたらしい

まあ、冷静のように見える織斑先生だが内心はかなり穏やかではないようでコーヒーに間違えて塩を入れてしまい山田先生にからかわれていたが・・・

アリーナではいまだ敵ISと織斑たちとが交戦しており風たち4人はそれを見守っていた

どうやら織斑たちはあれが無人機だということに気づいたのか動き

に迷いがなくなっていた

織斑の専用機”白式”の最強攻撃方法”零落白夜”

それは人間に向けて使うときは全力で使うことはできない

なぜなら零落白夜はISの絶対防御をも無効化する

つまりは肉体にたいして直接攻撃してしまう

命を奪いかねない危険な技だ

だが、無人機なら話しは別

全力で攻撃することができる

どうやらなんとか一夏の一撃を入れるということを狙ったいるようだ

このままなら問題なく片がつくな

凧がそう思ったとき事態は急変した

『遮断シールド解除』

「な!？」

なんと突如アリーナを覆っていた遮断シールドが突如解除されたのだ
アリーナ内にはまだ生徒が残っている

遮断シールドのせいで突入できなかったが逆にあちらからの攻撃や
流れ弾から生徒たちをまもる壁にもなっていた

だからこそ凧も事態を見守ることができたいた

だがその壁が解除されてしまった

「どうやら・・・なんとしても俺のデータがほしいらしいな」

凧はこれが篠ノ乃東だけの仕業ではないのではないかと考えた
篠ノ乃東が犯人だといった凧だが本心では違和感を感じていた

こういつては何だが篠ノ乃東はどこか自分に似た思考をしている節
があった

それなら今回のことは疑問が浮かぶ

そう、あまりにも醜いのだ

今回のISはあまりにもお粗末過ぎる、醜いといってもいいほどに
使われている技術は正直わからないが動きのパターンがわかりやす
い上に応用もできていない

そう、ただ無人で”動くだけ”なのだ

コアを作るのは篠ノ之束だけ

つまりこれを作ったのは間違いなく篠ノ之束

今回の件にかかわっているのは間違いのない

だが・・・首犯は彼女ではないな

今回の犯人はおそらく・・・

「まずいわよ・・・このままだと無関係の生徒に被害がでるわ・・・

」

楯無はあせりながらいう

「・・・凧・・・どうするの？」

「なっちゃん・・・」

簪と本音は不安そうに凧に聞く

凧はすこし考えているようだ

（このままだといろいろとまずいな。でも俺の機体はまだ飛行ユニットが未完成だし・・・簪をだすか？

いやだめだ。まだ簪の機体をさらすわけにはいかないし何より相手はおそらく亡国企業だ。最悪技術が流用 される危険性もあるな・

ならどうする？ここで最善の手は・・・）

「楯無」

なぎは考えがまとまったのか楯無を呼ぶ

「？なにかしら？」

楯無は自分が呼ばれるとは思っていなかったのかすこし驚いたように答える

「こうなっては仕方がない。俺の機体はまだ飛べない、だが簪の機体のデータを取らせるわけにもいかない」

「じゃあどうするの？」

「楯無が無人機の撃墜、俺が遮断シールドの代わりに守護領域の広域展開で生徒を守る」

「でも・・・それだと・・・凧が・・・」

凧の作戦に簪は意見する

意見するというよりは純粹に凧の身を案じている

凧の絶対守護領域は計算により成り立つ

広範囲に展開するならなおのこと

そしてその演算は当然凧の身にも負担がかかる

「だから楯無に出てもらうんだよ。おまえならあんな無人機ごとき瞬殺できるだろ？」

「うゝん、おねえさんでもできないことはあるのよ？」

「そうだな、料理とかなwww」

「うゝっそれはいわないでよ・・・」

凧は楯無の唯一？の欠点を突く

「おねえちゃん！！！」

そんなとき急に簪が姉である楯無を呼ぶ

「！なにかしら？」

急に呼ばれた楯無は驚いたようだ
それだけ簪が声を張り上げるのは珍しいことなのだ

「おねがい・・・風に負担をかけさせないで」

それは簪の心からの懇願であつた

「お願い・・・」

「・・・わかつたわ。なっちゃんの負担が最小限ですむように瞬殺してくるわ!」

簪の珍しい頼みが風のことであつたことに不満がないわけではないが風に負担をかけるのは楯無も許せるものではなかつた

「じゃ、頼みますよ」

風はそういうと自身の専用機 鋼 を展開する

「いくわよ、ミステリアスレディ」

それをみて楯無もISを展開する

本音と簪は風の後ろで事態を見守るようだ

それは自分が今回の件にかかわれないふたりのせめてもの行動であつた

激突！！楯無VS無人機（前書き）

今月最後の更新です

いま留年の危機なので忙しいです・・・

そしてできもいまいちという・・・

はあ・・・

激突！！楯無VS無人機

アリーナにでた楯無は風の指示通り敵ISを破壊するためにまずは交戦中に一夏と鳳のところに向かった

いきなりの遮断シールドの消失に加え突如現れた楯無に二人は驚いていた

「今度は何だ！？」

「だれよ！あんた！」

事態が自体だけに二人にはすでに余裕がなくどうもけんか腰になってしまっている

だが急いでいる楯無はそんなことを完全に無視した

・・・いつも他人のペースに合わせない彼女ではあるが

「二人は今のうちに避難しなさい。ここからはおねーさんがやるから」

どこか余裕のある口調で二人に避難の指示を出す
だが二人はそれを聞き入れられない

「でも！！ここでひいたら」

「そもそもいきなり出てきてなに命令してんのよー！」

聞き分けのない二人

実際いままで交戦していたのは自分たちなのに後から現れた楯無に命令されるのは尺に触るのだろう

だがそれは子供のわがままでしかない
今は非常事態

必要になるのは冷静な状況判断力と・・・

「はつきり言うわ。足手まといだから下がちなさい。じゃまよ」
確かなる実力である

いくらブリュンヒルデ 織斑千冬の弟であろうとも

いくら中国の代表候補生であろうとも

今のこの状況においては力不足であった

どれだけ訓練していようとそれは所詮競技として出しかない

だがこれは実戦

命がけの戦闘だ

それゆえに聞き分けがないのなら強制的に排除するだけ

「そう・・・仕方ないわね」

楯無はそうつぶやくと二人を強制的にアリーナの観客席に向けて吹き飛ばす

当然観客のいないところにだ

「なっちゃん 完了したわよ！」

楯無は二人を強制的に退避させると風に向けて言う

「確認した。 絶対守護領域広範囲展開開始」

風は楯無の報告を聞くとすぐさま守護領域を展開する

いつもは自身も周りにしか展開しないが今回は遮断シールドの代わり

それゆえに遮断シールドと同じ範囲で展開する

アリーナを観客席を守るように桃色の守護領域が展開される

「さっすがなっちゃん！この範囲で本当に展開できるなんてね」

楯無は感心したように風の行動について一人ごちる

「そんなことよりさっさとそいつかたずける。あまり長くは持たんぞ」

風のさっさと倒すよう促す

ここまで広域で展開すれば風自身にかかる演算による負荷は相当なものがある

機体はともかく風の脳には処理限界があるためそれを超えての展開はできない

展開されている守護領域が解ければ観客席はむき出し

そうなければ無駄な被害がでる

そうなる前に敵ISを倒さなければならない

ゆえに急がなければならないのだ

「わかってるわよ。じゃ、行きましょうか」

楯無はそういうと自身の近接装備 大型ランス蒼流旋 を構えながら敵ISに向かっていく

蒼流旋は表面に超高周波振動の水を螺旋状に纏っており先端部分がドリルのように回転する装備

さらには内部に4連装ガトリング・ガンを内蔵している

非常に強力な装備である

楯無は高速で接近すると迷うことなくそれを突き立てる

「くらいなさい」

突き立てたそれをさらに突き刺しながら内蔵されたガトリング・ガンを発射する

突き立てられた敵ISの左腕は爆発する

もし人間が乗っていたならすでに致命傷だがやはり無人機

破壊された左腕からはコード用名ものが見えておりショートした回線が紫電をあげており損傷の具合を物語っている

「まずは左腕、いただきね」

楯無はそういうとそのまま右腕も破壊しようと再度接近する

だが敵ISもそれを迎え撃とうとその長い腕を勢いよく振り回すが楯無はとまらない

ガッキイイイイイン！！

敵ISの腕が楯無を直撃する

普通なら非常にまずい一撃だが・・・楯無のミステリアス・レイデイには効かない

ミステリアス・レイデイ通称【霧纏の淑女】

ロシアの第三世代型IS

以前は「モスクワの深い霧」と呼ばれていた機体
アーマーは面積が全体的に狭く小さい

それをカバーするように透明の液状フィールドが形成されている
水のドレスのようになっていてそれはナノマシン制御によるものである

それは攻撃にも防御にも使うことができる非常に汎用性が高い
今回はそれを自機にまわせていたのだ

それこそドレスのように

だから敵ISの一撃を意にも返さない

だが当然それにも耐久限度は存在する

そして楯無のミステリアス・レイディのデータはすでに取られている

敵ISにもそれはインストールされていたようだ

敵ISはナノマシンを越えて攻撃するために自身の最強攻撃である
ビームを放つ

これは遮断シールドすら破壊するほどの威力

これを食らえばひとたりもない

だがそんなものがあたるような腕を楯無はしていない

突然ノータイムで放たれたそれを難なくよける

よけられたそれは守護領域に当たる

守護領域といえども突破されかねない威力ではあるが凧は演算により一極集中で強度を上げそれを無効化する

「あぶないわね〜でもおねえさんには当たらないわ」

そついうと楯無は敵ISから距離をとる

当然相手はそれを追撃するために再度ビームを放つが楯無には当たらない

しばらく回避を続けていた楯無だが突如空中で静止する

「じゃ、これで終わりにしようかしら」

楯無は待っていた

先ほどから回避しながら待っていたのだ

この技を使うために

”清き熱情”

密閉空間において、水のヴェールを濃い霧状にして充満させ、それを一斉に熱に転換し、対象物を爆破する能力

ミステリアス・レイディの特徴である水を操る能力の集大成ともいえるそれは言うならば時限式の爆弾のようなもの

その威力は絶大

なにより先ほどの一撃に加え一夏と鳳との戦闘によりかなりダメー

ジを受けていたため食らえば間違いなく即死

「じゃあね。清き熱情」

そして楯無は爆発させた

もろに食らった敵ISはそのままアリーナの地面に落下しそのまま機能を停止した

「んゝ勝ったよ！！なっちゃん！」

楯無は完全にそれが機能を停止したのを確認したあと再度攻撃をし完全に動けなくしてから凧にアピールする

「ああ、よくやったよ。でも、一撃で決められなかったしずいぶんと流れ弾を飛ばしてきたよな？」

「うつ・・・それは」

「かなり大変だったぞ？演算するの」

「うつ・・・」

凧からの指摘にたいしてうなるしかできない楯無

そこに援護射撃が加わる

「凧・・・苦しそうだった・・・」

「かつ、簪ちゃん!？」

「なっちゃんつらそうだったよ」

「本音ちゃんまで・・・」

もうなきそうな楯無

「ま、いいよ。あれは倒せたんだしな」

「そうだね・・・でもなんで今回は私・・・出さなかったの？」

「そっいえばなんで」

「・・・」

凧が話をまとめようとすると今回凧の指示によって参戦できなかった簪が疑問を口にする

「まあ、いろいろと理由はあるんだけど、最悪の事態に対する備えと対策のためかな」

「それって・・・どういう・・・意味？」

「今回の襲撃けどどうやら犯人は篠ノ之束だけじゃなさそうなんだ」

「!？・・・でもさっきは篠ノ之博士が犯人だって・・・」

先ほどの見解と異なることをいうなぎに対して簪は疑問を覚えた

「たしかに彼女も犯人、というより今回の騒動に絡んでるよ。コアを作るのは彼女だけ。調べないとわからないけどおそらく無人機に使われているコアは未登録のものはず。そうなると彼女が関係しているのは間違いない」

「でも、それだけじゃないんでしょ？」

「ああ、おそらく今回の主犯は・・・”亡国企業”」

「「！！！！！！？？？」」

「やっぱりね・・・」

「楯無は予想できたみたいだが、そう考えると納得がいくんだ。今回の襲撃のタイミング、無人機、そして遮断シールドの強制解除。どうも篠ノ之博士にしてはやりすぎだし最後のに関してはやる意味がない」

「そうね、あの人は他人に興味がないようだけど逆に妹には甘いみたいだし」

「どこかの誰かさんもだがな」

「うっ！」

楯無の発言に「お前もだろ」というニュアンスで返す風妹に甘い、というか弱いのは二人とも同じである

「あの時アリーナの観客席にはまだ篠ノ之箒がいた。わざわざ危険にさらすような行動をするはずがないんだ。それにあればはつきりいつてコアのなりそこない。本来のコアに比べて性能は各段位低い。彼女がそんな粗悪品を使うとは考えにくい。彼女じゃないなら誰が黒幕なのか・・・そう考えれば答えはひとつしかない」

「亡国企業・・・」

「まあ、証拠はないんだけどね」

「むしろ証拠はなくとも予想はできる。もし違ったとしても簪の専用機のデータはなるべくさらすわけにはいかない。相手がわからないのなら切り札は隠しておかないとな」

「切り札・・・？」

簪は自分が切り札といわれたいることに疑問を感じているようだ

「紅蓮は世界で最強。それだけの技術とポテンシャルを持っているよ。今はまだ稼働率が30%程度だが完全稼働すれば世界で紅蓮に勝てる機体は存在しない」

「実際紅蓮は脅威なのよ。更識としてもなるべく情報が回らないように徹底しているわ。だから簪ちゃんもむやみに展開しないようにね？」

楯無は暗部組織の長としての表情で簪に言う

「・・・わかってるよ・・・」

簪も自身の機体についてわかっているので納得する

「まあ、校内の行事での展開は別にかまわないよ。でも今回のような敵の実態がわからないときはなるべく展開しないようにね？」

「うん・・・」

「じゃあゝそろそろ後始末もかねて生徒会室にいこゝ」

先ほどまで話に出てこなかった本音が提案する

やはり本音は癒しの天才である

すこし張り詰めた空気だったこの空間も本音の一言でその空気も霧散した

のほほんとしたあだやかな空気になる

その後生徒会室に向かった4人だがそこで待っていたのは書類の山とこめかみをぴくぴくさせた虚であった

その日は生徒会室の電気が消えることはなかったそう

ガールズトーク（前書き）

なぜだろう・・・

テスト勉強そっちのけで書いている自分がいる

・・・この話投稿したら本気出す！

それと最近お気に入り件数が減りました

もしかして面白くないですかね・・・？

ガールズトーク

クラス代表対抗戦になぞの無人機が乱入しそれを撃退するというなかなかハードな一日を送りその後事後処理のために生徒会室でそのまま次の日を迎えてしまった凧、簀、本音、楯無、虚の5人は今凧たちの部屋に集まっていた

ことの発端は先日 of 無人機による一軒

それに対する事後処理の最中に今後について対策を練る必要があるということになった

本来ならそのまま生徒会室でもよかったのだが5人は徹夜状態しかも凧は守護領域の広域展開の際に脳をかなり酷使しているためかなり限界状態であった

そんな足元もおぼつかない凧の状態をみて簀が休むように提案

凧は拒否するが簀の涙による無言の圧力よ楯無からの「空気よめ」という視線を感じ仕方なく自室で寝ることにした

自室に戻るのも限界で困難な状態であった凧は自分と同室の簀と本音に肩を貸してもらいながら自室に向かった

ここまではよかったのだが・・・なぜか楯無たちもついてきた

いわく

「なっちゃんか休むならついでに私たちも休みましょうか。そうだ！どうせならなっちゃん達の部屋で休みましょうか。それならそのまま作戦会議もできるし！」

という楯無の発言により強制的に凧たちの部屋が作戦会議の場になってしまったのである

ゆえに今凧の部屋には先ほどの5人が勢ぞろいしていた

「凧・・・よく寝てるね」

凧は部屋にたどりつく到着替えることもなくすぐに眠ってしまったそれだけ守護領域の広域展開による演算の負荷が大きかったのだろうそんな凧の寝顔を見ながら簪は言う

その表情はいつも周りにたいして向けることにないとても穏やかな表情だった

「やっぱり〜かわいいよね〜」

本音は寝ている凧の頬をつつきながら言う

いつもはどこか気を張り詰めているのか無防備な表情を出すことのない凧だが寝ているときの表情はとても穏やかだった

「だめよ本音。寝ているのを邪魔してはいけなわよ」

虚はそんな本音の行動を注意するがその表情はとても穏やかでいつ

もの周りに見せているできる女性の表情ではなく純粹な姉としての表情だった

「んゝでもゝかわいいよ？」

本音はまたつつきながら言う

本音は凧の本質をすこしであれど理解しているのでこういった表情はうれしいのだろう

「あらあら、本音ちゃんなっちゃんにメロメロね」

楯無はそんな表情をしている凧と本音を見ながら言う
どこかからかつている表情であったがどこかうらやましそうでもあった

「本音・・・凧が・・・おきちやう」

簪は本音を注意するがやはりその表情はやわらかかった

「じゃあゝかんちゃんもゝさわればゝ」

本音はそれならば簪も触ればいいだろうと提案する

「えっ・・・でも・・・うん・・・」

簪は一瞬ためらうが自分も触ることにしたようだ
基本的に奥手である簪はいつもは恥ずかしくてそのようなことはできないのだ

「やっぱり・・・かわいい・・・」

簪も本音と同じようにつつきながら言う
うれしそうな顔をしている簪を見て楯無はうれしそだが悲しそうな表情をする

「お嬢様、くやしいなら自分も触ればいいのではないですか？」

「え！？いや、でもそんなこと」

「いつもあれだけスキンシップをしているのですからいまさら遠慮することなどないのでは？」

「いや、でもね！？かんちゃんがいるし・・・寝ているなっちゃんの表情かわいいし」

「はあ・・・」

いつもはおねえさんという立場からスキンシップをしてくる楯無ではあるもののここには簪がいる
妹の前でだらしのない表情を見せるわけには・・・
それに寝てるときのなっちゃんかわいいし・・・

ああ、私どうすれば！？

「お姉ちゃんは・・・風のことすきな・・・？」

「えっ！？」

突然の簪からの指摘に驚く楯無

「お姉ちゃん・・・いつもよりうれしそうだから・・・」

そう

楯無はいつもより機嫌がよかった

なぜならここは凧の部屋

正確に言えば凧たちのへやではあるが

自分が好意を抱いている人物が日ごろ生活している空間

そこに入れるというのは楯無にとってうれしいのだろう

生徒会長である彼女ならいつもは権限だとかでよくずかずかと人の部屋に侵入するのだが

ここには妹がいる

なのでなかなか近づけないでいたのだ

いくら妹との関係がギクシャクしてはいないとはいえこれは自分的にもプライベートでなかなか難しい問題なのである

妹である簪が凧のことが好きなのはどこから見てもばれればである

凧の前ではいつものクールさを発揮できずしどろもどろになってしまっ様子を見ていれば誰でもわかるだろう

まあそれは楯無本人にも言えることなのだが・・・

楯無はいつもはお姉さんキャラで通している

それは楯無としてに外向きの顔

誰にでもどこかなれなれしくそれでいて誰に対しても遠い位置に自分を置く

いうなら八方美人

ちなみに風も外向きにはかなりの八方美人な性格を見せている
風はどこかこの世界に対してあきらめている節がある

そんなところが自分と近くて親近感を楯無、いや風音は感じていた
それがいまの恋心にならなっていたのであった

いろいろといったがようは楯無は恥ずかしいのでいろいろと理由をつけて風の部屋にいけないでいたのである

「そうね・・・うん、私はなっちゃんのが好きよ」

どうせ見抜かれているなら真実を話したほうがいいと判断した楯無
口調こそいつもどおりだが表情は年相応の恋する乙女であった

「そう・・・なんだ」

簪はその楯無の返事を聞くと少し落ち込んだように見えた
ちなみに簪も姉が風のことを狙っているのを知っている

「かんちゃん？」

そんな簪の様子を気にかける楯無
もはや自分はなにかまずいことを言ったのかと不安になる
が、その心配は杞憂であつた

「私も・・・風が・・・好き！だから・・・お姉ちゃんでも・・・負けない！！」

簪はベッドから立ち上がると姉に向けて宣言する

楯無はそんな簪の行動に驚いたがふと表情を緩める

「そう・・・でもおねえちゃんも負けないわよ？」

簪はいままで内気でない罰的であつた

どこか自分の意見を言えないところがあつた

いつも周りに流されて結局自分の意見を言えない

流れに逆らう姿勢を見せながらも結局は飲まれてしまう

簪はそういう女の子であつた

でも今その簪が自分に向けて大きな声で宣言したのだ

いつもの内気な姿勢はそこにはなかった

だからこそ楯無もそれに答えた

「むっゝわたしもゝ好きなんだよっ？」

そんな二人にいままで風のほおをつついて遊んでいた本音が乱入する

ちなみに実のところこの三人の中で一番風についてわかっているのは実は本音だったりする

従者という立場上周りを見ることが多いからか本音はその風の根幹にある思いに気づいている

いつもはかなりぼわぼわしているが・・・

「本音も・・・なんだ・・・？」

「そ〜だよ〜これはかんちゃんでも譲れないよ」

いつも物事に対してどこかふわふわしていて流されている本音だが風のこの件に関しては引く気はないらしい
そのために本音は力をつけたのだから

「じゃ、これから私達はライバルってことかしらね〜？」

楯無が笑いながら二人に問いかける
ふたも笑いながらそれに答える

「「とうぜん（だよ〜）」」

「あらら、なんか二人はチームみたいね〜ここは虚は私に協力しないかしら？」

息がぴったりな簪と本音の様子をみてそう思う楯無

「遠慮させてもらいます。それと・・・大変言いにくいのですが」
ことわると同時に虚はどこか言いにくそうに言葉をとめる

それはいつもの彼女らしくなかった

「どうしたのかしら？」

「その・・・凧さん起きてますよ？」

「「「え！？」」」

三人完全に息が合う

「よう、つかすこしうるさいぞ」

そもそも凧が寝ている横でこれだけ話していればいい加減おきるというものだろう

本当は結構前からおきていたのだが内容が内容だけにいままで起きだせなかったというのが凧の本音だったが

「もしかして・・・聞いてた？」

おそるおそる楯無が聞く

いつもの彼女ならあわてることもなかったし凧が起きていることに気づかないこともなかったのだが

今回は会話の内容ゆえに完全に注意力が散漫になっていた

どんなにとりつくろったところで所詮はまだ17歳
乙女なのだ

「まあ、あれだけ横で話されればね」

「どこ……から・聞いてたの……？」

「簪が「私も……風が……好き！だから……お姉ちゃんでも・負けない！！」って言ったあたりから」

「っ／／／／／／／／／／」

自分の告白を聞かれていたことをしり顔を真っ赤にしてしまう

「なんというか……みんな俺なんかを好きになってくれたのはうれしいよ……でも」

「でも……なんなの？」

「俺は人を好きになるってのがよくわからないんだ」

どこか困ったようにいう風の表情はどこかさびしげだった

「好きになる、それは好意を寄せるということ。でも好意にもいろいろな形がある。だからよくわからないんだ。もちろんお前達は俺の中で特別だよ。でもこの感情がなんなのかよくわからないんだ」

「そう、なんだ。でもおねえさん達のこと嫌いじゃないんでしょ？」

「ああ、嫌いなはずがない」

「じゃあ、チャンスはあるわけね」

そついうと楯無は凧に向かって宣言する

「私は必ず、なっちゃんを奪って見せるわ！」

楯無のその宣言に凧は少し驚く

だがそれにつられるように簪と本音も宣言する

「わた・・・わたしも！あきらめないから」

「わたりもだよねっちゃんをげっちゅーしちゃうよ」

そんな純粹に自分に向けらる好意に凧はあたたかさ心地よさを感じていた

「ありがとう。必ず答えは出す。なんにも言わないことだけは絶対にない。だから・・・」

そこで一度言葉を切る凧
そしてこう続ける

「それまで待つていてほしい」

その凧の言葉に三人は迷うことなくこたえた

「もちろん」「」と

金と銀の転校生（前書き）

明日でテストが終わる・・・

いろいろな意味で・・・

金と銀の転校生

あのあと今後の対策を練るはずの集まりはガールズトーク+俺

の構図のお話会になってしまい結局とくに何も話はできなかった

まあ、情報が少なすぎるため今のところは相手の出かたを見ながら
情報を集めるしかすることがないのが現状

それがわかっているので虚もそれをとがめることなくむしろ自分も
その話の輪に入っていたのだらう

しかしまあ、やっぱり暗部に族しているたはいえみんなやはり年頃
の女の子なんだなと思う

いつも部屋も教室も同じな本音はともかくとしても

生徒会長にして現楯無である風音も、いつも完璧な虚もああして話
しているとそこら辺にいるみんなとなんら変わらない

ああ、簪はどうなのかって？

さっきから俺のそばで赤くなってますよ

どうも先ほどの自分の言葉を冷静になって振り返ってみて恥ずかし
くなったらしい

なのでいまは話の輪から外れて俺のそばにいる

俺はもちろん最初から輪に加わる気はないよ？

だって俺男だし

なんか加わると面倒だし

主に風音が面倒だからな

そんな感じでその会は夜遅くまで続いていた

なぜか昼ごはんを食べた後も俺の部屋にあつまり夜ご飯の後もなぜか俺の部屋に来ていた

まあ、最近は妹となかなか話せていなかった姉同士

それぞれいろいろと話すことがあるのだろう

あれ？俺もしかしてお邪魔虫？

・・・はあ

時は流れてある日のHR

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不

慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

転校生が2人やってきた

「お、男……？」

誰かがそうつぶやいた

そう、なんとその転校生のうちの一人は

”男”だったのだ

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を

」

シャルルが自己紹介を続けようとするが俺は次に起こるであろう事態に備えてポケットから耳栓を取り出した

「きゃ……」

「きゃ？」

さて、この耳栓をはめて、と

「「「「「きゃああああああっ……！！！！！！」」」」」

この衝撃波に備えないとな
周りを見ると一夏は耳をふさいでいたがどうやら意味がなかったようだ

となりの本音は・・・

「く~~~~」

・・・寝ていた

この中寝ていられるとは、なんともすごいことだ

というかいいのか寝てて・・・

「男子！ 三人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！ 守ってあげたくなる系の！」

「お母さんありがとう！今度の墓参りには草以外のものをあげるね
！」

なんというか・・・うるさい

興奮するのはわからなくもないのだがこれはさすがに度を越えている
それと最後のやつ・・・もう少し死者に敬意を払えよ
かわいそうだろ・・・

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

織斑先生が心底うざったそうにいう

織斑先生といえどあの衝撃波は応えるようだ

「皆さん、まだ自己紹介は終わってませんよ」

山田先生がなんとかクラスをまとめようとする

この状況でもまとめようとがんばる姿はまさに教師の鏡だろう

というか担任仕事しろよ・・・

その当の本人は口を開かないでただ一点…織斑先生だけを見つめている

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

織斑先生の言葉にまるで軍隊の上官に対するように返事をする転校生

その教官と呼ばれた本人はこれまた心底めんどそうに額に手を当てながら言う

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

織斑先生にどう返すと前を向き自己紹介をはじめめるが・・・

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「あ、あの、以上……ですか？」

「以上だ」

なんとも短かった

というかあの目は完全にこのクラスの人間を見下している

完全な侮蔑の視線を送っていた

なんとも生意気というか身の程知らずというか・・・

こいつ「ラウラ・ボーデヴィツヒ」については事前に楯無のほうから報告を受けている

ドイツ軍特殊部隊『シュヴァルツェア・ハーゼ』
通称『黒ウサギ隊』の隊長

とのことだ

そのほかの詳細な経歴もあったが正直興味ないのでスルーしていたので覚えているのはそれだけだ

それにしても「ウサギ」って

なぜかウサギといわれるとあの大天災「篠ノ之束」しか出てこないのだが・・・

ネーミングセンスｗｗｗｗ

あれ、俺こんなキャラだっけ？

「！ 貴様が」

ふとボーデヴィッツは一夏を見つけるとそのままつかつかと歩み寄り・・・

バシンッ！

「……」

「う？」

強烈な無駄の無い平手打ちを一夏に食らわせた

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

認めるも認めないもお前にその権利はないだろうに・・・

認めようが認めまいがいづらが姉弟であるという事実は変わらない

まあ、実際はどうだかわからないがな

「いきなり何しやる！」

「ふん……」

いきなりの平手打ちに呆然としていた一夏だがわれに戻るとボーデヴィツヒに食って掛かるが当の本人は興味もないといった風で流す

完全に気まずい空気がクラスに漂う

その空気を無理やり変えたのはやはり

「あー……ゴホンゴホン！ ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！」

織斑先生だった

さすがの影響力だ

あの完全に気まずい空気の中でも織斑先生が発言すれば全員の意識が織斑先生に向く

さて、HRも終わったことだしグラウンドにでも向かいますかね、次の授業はISの模擬戦闘とのことだから一応出ておくか

一夏はどうやら織斑先生よりデュノアの世話を頼まれてたようだ

教室を出る際

「おい、織斑と霧生」

と俺も呼ばれていた気がするがめんどうなのでスルーした

いや、だってデュノアは完全に”女”だからな

男にしては骨格が細すぎる

それに本当に男ならもっと大々的に報道されているはず

それなのに一切の情報が公開されることなくここに入学してきた

しかもあのデュノア社の社長の娘という話

あまりにも展開ができるぎっている

今イグニッションプランからまれて完全に落ち目のデュノア社
その息子がISを偶然にも動かせて国家代表候補生になる？

そんな偶然でできすぎている

資料だけでは判断がつかなかったため保留にしていたが
今日見て確信した

シャルル・デュノアは”女”だ

おおかた一夏の白式、俺の鋼のデータを盗むのが目的だろう
そんな人物の世話するのはごめんこうむる

わざわざ敵になる人間の世話をするのは意味がないからな

恩を売れるかもしれないがそんなことで自白なりするような人間な
らばこんな真似はしないはず

さらにもしなんらかの弱みを握られての犯行だとすればさらに厄介だ
どんなことをしても目的を果たそうとするからな

ま、こういうのは一夏に押し付けるの限る

あいつならなんかの拍子に正体をしてそのままフラグ立てそうだからな

いや。別にその方が面白そうだからとかが本音ではないぞ？

とりあえず保険としてシャルル・デュノアの経歴を楯無に調べさせておくか

自分で調べてもいいんだが面倒だからな

さて場所は変わって今俺がいるのは第二グラウンド
時間はすでに授業開始2分前

だがそこに一夏とデュノアの姿はなかった

おおかた女子に絡まれたか何かして時間がかかっているのだろう

俺はどうしてここにいるのかって？

それは簡単な話

俺はいつも制服の下にISスーツを着ているので着替える必要がないのだ

制服はそこらへんの木の陰にでも置いておけば問題ない

だれも盗みはしないだろうし盗まれても困らないし

・・・というか盗めないだろう

俺の制服は特別で生地の中に発信機がつけられている

それはとても小型で俺の専用端末ですぐに場所を特定できる

なんかやりすぎな感じがするがこれでも足りないくらいなのだ
なぜなら俺は自分でもあまり言いたくはないがこのISS二つでは
おそらく世界で1、2を争うほどの技術を持っている人間だ

それゆえに誘拐などの危険があるのだ

以前も一度どこぞのくず集団が俺を拉致しようとしたことがあった
まあ、返り討ちにしたが

いっておくが俺は技術者だが別に運動神経が悪いわけではない

さて、いろいろと話がそれたが今は授業開始一分前だ

いまだ二人の姿はない

二人が姿を現したのは授業開始5分後だった

当然のことだが二人は織斑先生の出席簿アタックを受ける

「遅い！」

バシンッ！バシンッ！

「っつ　！　……すいません」

「早く並べ。授業が始まらない」

二人はしょんぼりした様子で列に並び
デュノアは転校初日から怒られたので一夏よりもテンションは下が
っているようだ

「あら一夏さん、随分遅かったですわね」

遅れてきた織斑に対しオルコットはからかうように声をかける

「スーツを着るだけなのに、どうしてこんなに時間がかかるのです
か？」

ちなみにISスーツ。当たり前だがISに乗れるのは例外である俺
と一夏を除き女性のみ。つまりスーツも女性用のみしか必要が無い
だから普通のISスーツは水着：まあ所詮スク水に近く、肌の露出
は多い。でもISにはシールドバリアー及び絶対防御があるので、
スーツの面積は少なくとも何の問題もない

それでも、ISスーツにも通常の拳銃の小口径弾を防ぐ（衝撃は通
る）くらいの防御力はある

ようは体のいい防護服の役目を果たしてくれるのだ

なにが言いたいのかというと学校にいるときはISスーツはずっと
きていてもいい

というかそのほうが都合がいいのだということだ

「道が混んでたんだよ」

「ウソおっしやい。いつも間に合うくせに」

一夏の返事にたいしてどこか遂げのある返事をするオルコット
ちなみにオルコットには一夏がフラグを立てている

「ええ、ええ。一夏さんはさぞかし女性の方との縁が多いようです
から？　そうでないと二月続けて女性からはたかれたりしませんわ
よね」

「なに？　アンタまたなんかやったの？」

その発言に後ろから鳳が話に参加してくる
というかふたりともそろそろやめないと・・・

「こちらの一夏さん、今日来た転校生の女子にはたかれましたの」

「はあ！？　一夏、アンタなんでそうバカなの！？」

いやいや君たち後ろ見たほうがいいよ

「安心しろ。馬鹿は私の前にも二名いる」

ほら、後ろに鬼斑先生がいるよ

バシバシーン！

青空に出席簿の音が響いた

ご愁傷様です

金と銀の転校生（後書き）

次の更新は一週間後です

激突する鋼と疾風（前書き）

なんか完成したので更新しておきます

最近はめつきり感想もへり評価もなかなかもらえないので若干さびしいですね

見返すためにも更新がんばりますかね

・・・べつにテストがいろいろな意味で終わったから現実逃避しているわけではないです、きっと

激突する鋼と疾風

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「」「」「はい！」「」「」

織斑先生の言葉にみんなが返事をする

今は二クラス合同であるためいつもよりも声量が大きい

ああ・・・耳痛いな

ちなみにさっきおもいつきりたたかれた二人はというと・・・

「くっつ……。何かというとすぐにポンポンと人の頭を……」

「……一夏のせい一夏のせい一夏のせい……」

二人とも涙目で叩かれたところを押さえて、鈴に至っては呪詛をつぶやくように一夏の名前をつぶやいている

完全に自業自得だろうなのだがあの出席簿の威力はすさまじいのだらう

俺はごめんだね

「では、今日は戦闘を実演してもらおう。ちよつど活気溢れんばかりの十代女子もいることだしな。」

凰！ オルコット！

「ど、どうしてわたくしまで！」

オルコットが不満の声を上げる

いい加減学習しようよ

この人に反論は意味ないよ
なんせ人のいうことを聞かないからな

まあ、いいやつだったよ

・・・ふるいなこのねた

「専用機持ちはすぐに始められるらだ。いいから前に出ろ」

「だからってどうしてわたくしが……」

「一夏のせいなのになんでアタシが……」

「お前ら少しはやる気を出せ あいつにいいところを見せられるぞ？」

ああ、なるほど

一夏をだしに使うわけですね

わかります

「やはりここはイギリスの代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね！ 専用機持ちの！」

二人は織斑先生の言葉にまんまとうまく乗せられる
・・・ほんと単純なやつらだなおい

「それで、相手はどちらに？ わたくしは鈴さんとも構いませんが」

「ふふん。こっちの台詞。返り討ちよ」

二人はすでに臨戦態勢にはいってお互いさつきを出している

すこしはおちつけよ・・・

「慌てるな馬鹿ども。対戦相手は」

キイイイ・・・

空気を切り裂く音

そして聞こえてくる聞きなれた声

「あああーっ！ ど、どいてくださいっ！」

一夏に向かう、見覚えのありすぎる姿

ドカーン！

一夏はかろうじて白式を展開することに成功したが、ぶつかってきた影と一緒に数メートルごろごろと転がる

土煙が晴れ、そこにいたのは

我がクラスの副担任山田先生

そして一夏は、山田先生のISスーツでより強調されたその豊満な胸を鷲掴みしていた

なるほど

これが俗に言う「ラッキースケベ」というやつか

それにしても一夏はどうもそういったスキルが高いな

気がついたらフラグ立ててるしこういったように何かと男子からすればうらやましい状況に陥るし

まあ、個人的には別にどうでもいいわけだが

ビシュン！

一夏に向けて突如ビームが発射されるがそれをビを背を反らせてかわす一夏

「ホホホホ……。残念です。外してしまいましたわ……」

ガシーン

両手に持った双天牙月を連結。両刃の青龍刀にするとそれをフルスイングで投げる

「うおおおっ!？」

それをもう一度なけぞって交わす一夏
だが青龍刀はブーメランの特性を持った武器
つまりは戻ってくるのだ

かわすときに仰向けに倒れた回避不能の一夏に向かって双天牙月が迫る

「はっ!」

ドンドンッ!

銃声が響く

やったのは山田先生
いつものほわほわした雰囲気から一転、目つきも鋭くなって、上半身だけを起こした状態で、双天牙月を射撃

その軌道を逸らした

それたそれは一夏にあたることなく地面にささる

「山田先生はもともと日本代表候補生だ、これくらいはぞうさもな
い」

「結局候補生どまりでしたけどね」

山田先生の射撃の技術に驚いている一同に対して織斑先生は山田先生がもと代表候補生であったことをばらし本人はすこしテレながらいう

ちなみに俺は知っていたので特に驚いてはいなかった
情報源はあの人たらしな俺の幼馴染である

個人的に言わせてもらうなら山田先生の射撃の腕自体はオルコット
と大差ないように思える

オルコットになくて山田先生にあるのはおそらく”経験”と”状況
判断能力”だろう

鳳にかんしてはデータがないのでよくわからん

対抗戦のときも試合したいは特に気にしていなかったのでよく覚えて
いない

まあ興味もないのだが

ドオオオオッン！！×2

お、どうやら模擬戦は終わったみたいだな

結果は言わずもがな

山田先生の圧勝のようだ

ちなみに試合内容はまったく見ていなかった
なら、なぜ試合内容がわかったのかという・・・

「くっ、うつ……。まさかこのわたくしが…」

「あ、アンタねえ…何面白いように回避先読まれてんのよ…」

「り、鈴さんこそ！無駄にばかすかと衝撃砲を撃つからいけないの
ですわ！」

撃墜された二人が負けた原因をお互い擦り付け合っているからだ
普通に善戦して負けたのならこうはならないだろう

二人は腐っても代表候補生

その二人がこうなるということはよほどひどい試合内容だったとい
うことが推測できる

代表候補生はプライド高いからな

・・・簪はどうだか知らないが

「さて、これで諸君にも教員の实力は理解できただろう。以後は敬
意を持って接するように」

織斑先生がざわついた空気をしめる

このクラスは山田先生をなめている節があるからな
まあそれは本人に問題があるわけだが・・・

織斑先生はこれが狙いだっただようだ

おそらく今回の模擬戦に狙いはIS戦闘の実演だけではなく調子に
のっている専用機持ちに対する牽制

学園の教師の実力を見せ付けることだろう

実はこの学園にいる教師のほとんどが過去に候補生だった者で占め
られている

そのため実のところこの学園の教師の実力はそれなりに高い

それを生徒に自覚させることが今回の目的

やれやれ、やってくれるね

「さて、模擬戦が思ったよりも早く終わったからな」「うっ!!」「
そこ、静かにしろ!」

「はい・・・」

楽勝と高をくくって臨んだだけに二人の落ち込み方がすごい

「よし、ではデュノアにも模擬戦をしてもらおうとするか」

織斑先生は急にそう言ってきた

つか転校そうそうに模擬戦やらせるんすか・・・しかもいやな予感
するんすけど

「え！？僕ですか！？」

「そうだ。転校生の实力を見ておきたい。相手はそうだな、霧生お前がしろ」

いやな予感的中

「俺ですか・・・まあいいですけど」

ま、ここで反論して逃げることもできるんだけど別にいいか

面倒ではあるが一応デュノアの实力をじかにみるいい機会ではある

こいつと敵対する可能性もあるしな

データは大いに越したことはないだろう

「デュノアもいいな？」

「は、はい！！」

さてさて、じゃ久しぶりの戦闘

適度にやりますかね

今俺は空中でデュノアと向き合っている

お互い当然専用機を装備している状態である

デュノアの機体は「ラファール・リヴァイブカスタム」

第二世代のラファールのカスタム機である

この機体は第二世代機のなかでもなかなか優秀な機体だからな
とはいえ本音ほどの実力はないだろう

ま、侮りは禁物だがとりたてて騒ぐ相手でもないだろう

『では、お互い準備はいいな』

「はい」

「いつでも」

『では、模擬戦開始！』

織斑先生の開始の宣言がくだる

お互い最初は様子見

互いに射撃で牽制しつつ距離をとる

デュノアはアサルトライフルによる射撃

俺は守護領域を展開しつつのレールガンによる射撃

こういううちましました戦いは向こうに分がある

俺の鋼の武装はどれも長距離からの一撃による広域殲滅系

つまりは発射するのに必ず隙ができてしまう

しかしデュノアの場合は火力こそ低いがりヴァイブには多種多様な
射撃武器がある

それを乱射することでこちらに砲撃の隙をあたえない

ライフルである以上とうぜん玉切れが存在するのだがそれを補って
いるのはデュノアの”ラピッドスイッチ”という技術だ

本音も使うそれはりヴァイブの火力不足を補ってあまりある

無限に思えるほどの弾幕

正直いやになるな・・・

とはいえこちらには絶対の壁である守護領域がある
つまりところお互い有効打が与えられないのである

今は模擬戦開始から20分経過した
しかしお互いのシールドエネルギーは削れていない
だが戦況は風傾いていた

「はあ、はあ、なんでそれだけ当ててるのに、破れないのかな、その壁」

デュノアはかなり息切れしながら守護領域の硬さにあきれる

「その程度の火力じゃ何発当たろうがこの守護領域は破れないさ。
なんせ世界最高硬度だからな」

俺はそれに対しさも当たり前のように自身の壁の硬さについてあかす

「それじゃあ、いくらこの距離から撃つても意味がないんだ」

「ま、そういうことになるな」

ちなみに今は戦闘中だ

本来ならこうして会話することなどないのだがお互いこの状況では
決着がつかないことを理解しているしまた、会話の最中に奇襲して
も意味がないことを理解しているため会話を続ける

「で、どうする？このまま続けても意味がないと思うが」

「・・・そうでもないよ」

俺の言葉に対してデュノアは少し考えてからそれを否定する

「ほう、この壁を破れる武装がそっちにあるのかな？」

探るように俺は聞く

デュノアの機体には本来ならありえないほどの武器がインストールされていた

おそらくは拡張領域を増やしているのだろう

こちらはまだ全武装を把握できていない以上探りをいれているのだ

「まあね。ひとつだけ、あるよ」

俺の問いに対してデュノアは肯定をもって答える

「ふーん、でももしそうなら最初から使えばいいと思うよ」

俺は思っことを口にする

そう、もし本当にあるのならすべきではないし最初から使うべきはったりとは思えないが実のところはわからない

「切り札、だからね」

少しいにくそうに答えるデュノア

「切り札、ね。じゃ見せてみなよ。その切り札」

俺は挑発するべくさらに言葉を続ける

「その切り札が無力な物だっということがわかるからさ」

そして最後にこう締めくくる

「俺はここから動かないことを約束しよう。存分にためすといいよ」

さて、のってくるかな？

のってきてもいいいのってこなくてもいい

切り札というそれがどこまでのものなのか
見ればいいけど見れなくても問題はない

どちらに転んでもこの守護領域が破れることはないだろうからな

「そう・・・後悔しないでね!!」

そういうとデュノアは手に持っていた射撃武器をしまつと俺に向かって突っ込んでくる

そして俺の目の前で止まるとデュノアの盾の装甲が飛び、中から

六十九口径パイルバンカー《灰色の鱗殻グレー・スケール》通称

『盾殺しシールド・ピアース』

一発を撃ちこみ、終わりではない。

灰色の鱗殻はリボルバー機構。つまり連射可能
ズガンッ！ズガンッ！ズガンッ！

計3発が俺の鋼の守護領域に炸裂する

これは第二世代型最強の攻撃力を持った装備

さすがにこれを食らえば破れるただろうと確信するデュノア

だが・・・

「なかなかの威力ではあるけど・・・全然足りないよ」

守護領域は破れることはなかった

それもそのはず

この守護領域はただの壁ではなく風の演算により成り立つ壁
それを破るには第二世代の火力では足りうるはずがない

「そ、そんな・・・」

自身の切り札を使っても倒せないことに言葉を失うデュノア
だがそれは致命的な隙となった

「じゃ、終わろうか」

そういうと俺は両肩からハドロン砲をデュノアめがけて発射する
本来なら長距離武器であるそれを至近距離からもろに受けるデュノア

とうぜんシールドエネルギーが残るはずもなく

そのまま地上に向けて激突

絶対防御により怪我はしていないだろうが相当な衝撃がかかったの
だろう

デュノアはそのまま気絶したようだ

『そこまで！勝者 霧生凧！』

こうして模擬戦は俺の勝利で終わった

面倒ではあったがデータは取れたしまあよしとしよう

敵を知り己を知れば百戦危うからず（前書き）

タイトルに深い意味はないです

そして感想がほしい今日この頃です

敵を知り己を知れば百戦危うからず

あの模擬戦のあと俺はすぐに授業を抜けてきていた

理由は今回の模擬戦で得られたデータの整理と検証のためである

・・・というのは表向きの理由で本当はすこし疲れたからである

凧の機体”鋼”の絶対守護領域は凧本人による直接演算により展開されている

そのためいくら計算に慣れていても、いくら相手の武器の威力が低くても

常時全力で脳を使えば疲労はするのだ

しかも今回はデータ収集のためにあえてすぐにかたをつけずに長引かせていたためいつもよりも脳にかかる負荷は大きかった

そう、普通に先ほどの模擬戦を見ているものなら機体相性の関係で勝負が長引いたと思うだろう

それはひとえに凧の実力を正確に知っているものがいなかったからである

あの場には本音もいたが彼女も凧の実力を正確には知らない

知っているのは生徒会長である楯無だけである

別に隠しているわけではないのだが凧自身がいつもなかなか戦闘に自ら出てこないため実力をはかる機会がないのである

ではなぜ楯無が知っているのかということになる

しかしその理由もべつに簪や本音より特別扱いしているわけではなく単にそういう機会が必然的に多かったのがりゆうである

楯無の専用機である”ミステリアスレディ”の整備はいま凧が行っている

しかし凧はミステリアスレディをさらに発展させるべく自身が考えた新しいシステムや武装をミステリアスレディに加えているのであるそのため必然的に模擬戦により能力を試さなければならず、凧は完成していない技術を他人に知られるのを快く思っていないため自らその模擬戦の相手を務めている

それにより楯無は凧の実力をしっているのである

話がそれたがつまるところ先ほどの模擬戦では凧はこれっぽっちも実力を出してはいなかったたのである

確かに機体相性はそこまでよくはなかったがその気になれば超高速移動により距離をとり層転移砲による広域殲滅でかたをつけることはできたのである

凧の機体にはISのハイパーセンサーでも目視でも姿を捉えられなくする特殊な技術が使われている

これを使わなかったことから凧の手抜きぶりがわかるだろう

さていろいろといったが今凧はいつも自分が使っている整備室・・・ではなく生徒会室にいた

本当は整備室に行こうとしたのだがそこに突如

「あれ、なっちゃん？今はまだ授業中よ？そんないけない子にはお姉さんか個人授業をしてあげなくちゃね」

などとよくわからないことをいわれて生徒会室に連行されたため
ある

といふかなぜ楯無も授業中なのにそこらへんをうろついているのか
というのをいったら負けな
気がする

と、そんな感じで今俺は生徒会室に備えてけられているソファーの
上で今回の模擬戦のデータを眺めていた
今回の戦闘によりデュノアの実力と専用機の詳細なデータが
取れた

もちろんデュノアが本気でなかったという可能性も考えられるが対
戦してみてそれはないと俺は核心していた

あのデュノアは正直自分を隠したり偽ったりするのが苦手な人間だ
それが俺が模擬戦を通して感じたデュノアの本質であった

根拠などない

でも俺はそうかんじたのだ

研究者、開発者としてこういう根拠のない理由で行動するのはあま
りほめられたことではないのだが俺は自分の勘などを信じている

そんなわけでこれでもしデュノアと正面から激突することになって
も問題はないだろう
しかしわからんな

なぜあんないい子がこんなスパイまがいの行動をとるのだろうか
もちろんまだスパイと決まったわけではない

しかしながら今回の模擬戦中あいつがこちらの武装データなどを記録していたのを俺は見逃していなかった
だからこそスパイだと確信を持っていえる
しかし彼女、いや表向きには彼だが、がこんな行動をするのか疑問が残る

デュノア社のホームページにはシャルル・デュノアのこれまでの経歴が載っていた
しかしそれはどれもありえなく、また都合がよすぎた

そして俺はこの経歴の書き方に覚えがあった

そう、これは国や企業がある人物に経歴を捏造するときによく使う方式だった
これから察するにデュノアは愛人かなにかの子供で歓迎されてはいないのではないかということだ

もし本当に実の子ならばこのような扱いはしないだろう
完全に女である彼女をまるで道具の名前などを変えるかのように経歴を抹消し偽造し、名前を変え、ここに送り込んでくる
こんなことをするとは思えない
そして彼女がすすんでこんなことをするとも思えない

まあ、すべて推測でしかないがな

とりあえずは様子見るしかないか

もしスパイならばかならずデータを盗むに俺に直接接触してくるはずならばそこで確たる証拠を押さえればいい

それまではいまの状態を維持するしかないか・・・

と、そこまで考えて俺がふと顔を上げるとなぜか俺の目の前に、それも超至近距離に楯無の顔があった

「何をしてるんだ、楯無？」

俺はとりあえず聞いてみることにした
楯無はすこしすねた感じでそれに答えた

「もう、せつかく後もう少しでキスできそうだったのに！」

私不機嫌ですという感じで答える楯無

「いや、勝手にそんなことするなよ。それに俺はまだ誰と付き合うのかも決めてないぞ」

「だからこそよ！こうして誘惑すればいずれなっちゃんの心は私色にそm「染まらないからな」もう！最後まで言わせてよ！」

俺はしょうもなくなりそうなので楯無の言葉を途中でさえぎった
もうなっているのかもしれないが

「ま、それはいいとして、頼んでいた件はどうなってる？」

「ああ、あの転校生の詳細な個人データだったわね？」

「ああ、特に家族環境について詳細に頼む」

「ええ、わかったわ」

そういうと楯無は調べてきた転校生のデータ

正確にはシャルル・デュノアのデータについて話し始めた

それをまとめるところだ

シャルル・デュノアは偽名である

本名はシャルロット・デュノア

家族は母と父

父はでシリル・デュノア

母の名前は不明

というものだった

「思ったより少ないな」

俺はすこし落胆しながら言う

正直あまり詳しくはわかっていないのだ

本名が割れたところで意味は薄い

「仕方ないじゃない、どうもあの子データ自体が存在しないみたいなのよ」

「存在しないか・・・意図的に消したのかそれとも作ってすらいないのか」

「そのどちらかでしょうね。どちらにしろ今はどうにもできないわ」

すこし疲れたように言う楯無

実際そこまで確信にせまるような情報はなかったとはいえ彼女はこの学園の生徒会長で暗部の長でもある
つまるところそこまで暇ではないのだ

そんな中でも凧からの頼みをきき、情報を集めたのだからさすがといえるあろう

・・・まあ、そのため生徒会のほうをおろそかにしていたため仕事
がたまり虚に雷を落とされるのだがそこは割愛しよう

「ところで、私のISはどうなってるのかしら？」

自分のISの状況を尋ねる楯無

じつは今彼女の専用機は凧による整備、改良を受けておりいま手元
にはない

これは国家代表としてはかなりまずい状況なのだが整備を担当して
いるのが霧生凧といういうならばIS界の帝王ともいえる人物であ

るためロシア本国も強くいえないようだ

ここでその霧生風についておさらいするが、風はISをいまの第三世代に押し上げた功労者である

いままでの国が開発しようとしてもできなかったものを開発し、その後も、慣性停止結界を開発したのも実はこの霧生風であるといわれている

公式ではある国の開発機関が開発したとされているがその機関はどんな方法を持っても情報を得ることができずまた存在も確認されていない

ゆえにイメージインターフェースの開発者でありながらなかなか表に出てこない霧生風が開発したものではないかという説が有力になつており、またそれは事実でもある

と、そんなわけで霧生風はIS界において篠ノ之束と並ぶほどの重要人物なのである

しかしながらやはり表舞台に顔を出してこないため世間一般には認知されていない

「一度完全にはらしてから再構成してるよ。今のところの進行状況はまだ三割つてとこだね」新しく装備とシステムを追加したからなかなか進まなくてね」

苦笑しながら楯無の問に答える風

それに対して楯無は風の発言のなかの新装備、システムというのに

反応した

「新しくなにかつけたんだ〜で、何をつけてくれたのかな〜？」

「まだ未完成だから今は教えないよ」

若干というか完全に誘惑するかのような体勢で凧に質問する楯無だが凧はそれをあっさりと切り捨てる

「え〜〜いいじゃない教えてくれたも！」

む〜私不機嫌ですという感じで言う楯無

ひりげられた扇子には”不機嫌！！”と達筆で書かれていた

・・・いつも思っただがあの文字いちいち楯無本人が書いているの
だろうか

だとしたら相当に無駄な時間を使っているような気がする

「俺は未完成なものを人に見せるのあまり好きじゃないんだよ。無
様だからね」

凧は自分の開発したものに対して妥協は絶対にしない
自分が求めた水準に達しなければそれがたとえ完成したとしても破
壊するほどである

ちなみにそれで言うと今の鋼や紅蓮も風の臨んだ水準にはない
しかしながら少しこまったことにあの機体は操縦者のデータがなければ完成しない

そのため簪には未完成な状態で一度戦闘をさせている

それ自体は別段おかしいことではない

問題はその後だ

戦闘を終えたあともう一度紅蓮を調べたところあの機体はもうこちらからの介入ができなくなっていたのだ

あの機体には自己進化開発を行う能力をつけてある

しかしそれはあくまでも戦闘においてより操縦者に合わせるためにつけた程度の機能である

それがふたを開ければこのとおり

おそらくは簪のために自分で進化すると決めたのだろう

自分の主のために自分の牙は自分で研ぐと

まあ、中枢をいじれなくなったとはいえ飛行ユニットなど外付けの物はいじれるため今俺が紅蓮にできるのは一刻も早く”エナジーウイング”を装備させることぐらいである

あとは簪の望む形に自己進化していくだろう

ま、そうやっても元よりも性能が落ちることだけはないから問題はないだろう

若干開発者としてはさびしい部分もあるがあれはあくまでも簪の専用機だからな

それに”鋼”も整備しないといけないしな

ちなみに鋼のほうはというと最近どうもこちらに接触しようとして

いる節がある

装備するときに少しいつもとは違う違和感を感じる
自分以外の他人を近くに感じるような違和感だ

ISには意思がある

これは教科書などにも載っているがなぜ意思があるのかは載っていない

まあ、わからないことは載せられないしそもそも確たる証拠はないわけだしな

俺は解析を進めたところと同じ知能を有していたことからおそらくは人工知能なのだと推測したが残念なことにそれを裏付けるための解析はできていない

できたのはその人間と同じ知能を有している
もつと正確に言えば人間と同じ思考波形を見つけたといったところだが

まあ、人間そのものであるという可能性もあるのだが・・・ないな
そんな方法があるのなら教えてほしいものだ

まあ今はこれに関してもこちらからできることは少ない
いくらISの本質がよそくできたとはいえ解析ができているわけではない

完全なるブラックボックス

藪をつついて蛇が出るくらいならまだかわいいが、アナコンダクラスの大蛇が出てきてはたまったものではない

解析はしてみたいが今感じている違和感が解決するまでは危険であ

ると判断して今は得になにもしていない

「ふん、まそこはできるのを待つとして」

そこで一度楯無は言葉を切り生徒会室にある時計をみて時間を確認する

今は12時13分

昼飯にはいい時間であった

「そろそろお昼にしない？おねさんおなかすいたわ」

「それもそうだな。込むのもあれだしそろそろいくとするか」

そついいながら座っていたソファから立ち上がる風

楯無も生徒会長のいすから立ち上がるとかなり自然な動作で風の腕に抱きつく

「・・・なぜに？」

「いいじゃない。淑女をエスコートするのは男性の義務なのよ？」

何食わぬ顔でそんなことをいう楯無に風はあきれながらもおそらくなにをいってもむだなのだろうとさとする

「はぁ・・・わかりましたよ。お嬢様？」

風はそついうと楯無を腕に装備した状態で学食に向かっていった
その途中で当然ながらほかの生徒に見つかり

「生徒会長に彼氏現る！？」

「相手はあの男性操縦者」

などと騒がれそれを聞きつけた簪と本音は楯無とすさまじい争いを
繰り広げていた

そんな三人をみながら凧が

『こんなにも俺を思ってくれる人がいるなんて・・・』

と少しうれしそうにしていたのは本人しか知らない

敵を知り己をれば百戦危うからず（後書き）

次回はおそらく遅くなると思います

再再試&補講・・・

黒の影（前書き）

今年最後の更新になります

年明けに学力到達度試験があるためその勉強に移ります

このままだとリアル留年なので・・・

なにとぞご理解をお願いします

黒の影

「ええとね、一夏がオルコットさんや鳳さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握していないんだよ」

「そ、そうなのか？一応わかっているつもりだったんだが・・・」

シャルル、いやシャルロット・デュノアが転校してきてから最初の土曜日

場所は第三アリーナ

ここで一夏とデュノアは土曜にもかかわらずISの訓練をしていた基本的に土曜日というのは世間一般的な観点から見れば学校は休みの日である

しかしここIS学園では土曜日にもかかわらず授業が存在するとはいつてもあるのは午前中だけで、午後からは完全に自由

なのでほとんどの学生は午前中に学習した内容をアリーナなどで試したり図書館などで復習したりなどと土曜日は過ごすわけである

ここでひとつおさらいするがここ、IS学園には第二世代型IS打鉄、ラファールがある

とうぜんほとんどの学生は専用機を持っていないので実習いがいの時間に個人的に使うには手続きをしなければならぬ

しかしながら量産機とはいえ数には限りがあり、また風がその貴重な量産機を2機もらっているためいま学園にあるISの数は少なくなっている

なにを言いたいのかというと今アリーナで訓練できるものはその高い倍率のISを持っているもの

つまりは専用機持ちがほとんどであるということだ

ここで今アリーナにいる人物について触れてみよう

今ここ第三アリーナには専用機持ちが3人と量産機使いが2人いる
その専用機持ちとは俺霧生風、織斑一夏、シャルル・デュノアの3人
対する量産機使いは名前も知らない先輩である

さて、もどるが今俺は一夏たちの訓練、もとい一夏いじめに参加している

「理解できているならこんな結果にはならないさ。どうせなんとなくなんだろ？」

「一応は理解してるって！」

「一応、じゃダメだろ？言っておくが知っているのと理解しているのは違うからな？」

「うつ・・・そう言われるとな・・・」

「そうだね。知識としては知ってるって感じかな。さっき僕と戦ったときもほとんど間合いを詰められなかったし・・・」

俺の発言に同意するデュノア

この発言からわかると思うが先ほど一夏はデュノアと模擬戦をした結果はいうまでもなく一夏の惨敗

正直ひどいものだった

ただ突っ込む一夏に対してデュノアママシンガンによるばら撒き打ちをしていただけ

無理に突っ込むとはせずとりあえずは距離をとろうとする一夏に

たいしてアサルトライフルで追撃をする
そしてやけになり瞬時加速で突っ込みグレネードでKOという実に
シンプルな戦いだっただ

「・・・確かに。瞬時加速も読まれてたしな・・・」

「一夏のISは近接格闘オンリーだから、より深く射撃武器の特性
を把握しないと対戦じゃ勝てないよ」

「感覚でわかった気になるからああいう結果になるんだ。だいたい
近接武器しかないのに距離をとってどうする。自分から攻撃しろと
いつているようなものだぞ」

「おい・・・それじゃ俺どうするんだ？」

「なにごと実践してみるのが一番だ。物分りがいいやつならとも
かく悪いお前は体で覚えるしかない」

「・・・やっぱ最後にはそうなるのか・・・てか物分りが悪いって
言っただな!？」

「事実だろう？」

「知識として知っておくのは大切な事だけど、やっぱり実際にやつ
ていくのも大切な事だと僕は思うよ」

織斑の戦闘にだめだしをしつつ俺はとりあえずは実際に遣ってみる
よう進める

デュノアもそれに同意する

「・・・そういえばさ、どうして俺の瞬時加速の軌道をシャルルは読めていたんだ？」

「それはね、瞬時加速って直線的だから反応できなくても軌道予測で攻撃できちゃうからなんだよ」

「なるほど、イノシシみたいなものか」

自分で言っていて悲しくならないか？

というよりも一夏のだしどころが悪いだけなんだがな

「そもそもマシンガンというのはある程度来る場所さえわかればそこらへんにばら撒くだけで当てることができるんだ。早い話軌道予測をされるようなものをタイミングを計らず使うからお前は馬鹿なんだよ」

「辛辣だなおい・・・」

「俺は事実しか言わないからな」

ちなみにここだけの話

瞬時加速中に方向を変えるのは不可能ではない
しかし世界中探してもそんなことをやるやつはいない

「あ、でも瞬時加速中はあんまり無理に軌道を変えたりしない方がいいよ。空気抵抗とか圧力の関係で機体に負荷がかかると、最悪の場合骨折すると思う」

そう

空気抵抗などの関係で急に向きを変えることは肉体への負担を

強めるのだ

わかりやすく言うと時速100キロで走る車を急に90度方向転換させるようなものである
早いはずのミンチになる

ISにはそのためのPICがついているがそれにも限界はある

「・・・それこそ隙を作り出しての一撃が重要になるんだが・・・
武装がないからな」

一夏のISには牽制になるような武装が一つもない

あるのはエネルギー無効化攻撃を可能とする雪片二型のみ
しかもその雪片も自身のシールドエネルギーを消費する諸刃の剣

正直初心者が操りきれぬ代物ではない

「そういえば、一夏の白式って後付装備がないんだよね？」

「それなんだよなあ・・・何回も調べてもらったんだけど、拡張領域が空いてないらしい。だから量子変換が無理なんだと」

拡張性がない機体

そういうのは大抵、拡張性を犠牲にして機体性能を上げるかそれだけの武装を持っているかのどちらかになる

一夏には同考えても後者だろう

あの雪片二型はあいつの姉である織斑千冬の使っていた”暮桜”にあつたものと同じ

しかもあの機体もそれしか武装がない

俺が思うにあの一夏の白式と暮桜を作ったのはおそらく篠ノ之束だろう

いちおう白式は俺が前いた倉技研が開発したとなっているがそんなデータは見たことがない

あ、ちなみに俺はここに入るときに倉技研から抜けている
かなり面倒だったけど完全第三世代完成型のデータを渡すことで黙ってもらった

どんなものを渡したのかは後に語るとしよう

「たぶんだけど、それってワンオフ・アビリティーの方に容量を使っているからだよ」

「ワンオフ・アビリティーっていうと・・・えーと、なんだっけ？」

「文字通り唯一仕様の特殊能力だ。ISと操縦者が最高の相性になった場合に発生する能力。ちなみに基本これは二次移行後から発現するのが基本だ」

「風の言うとおり普通は第二形態から発現するんだよ。それでも発現しない機体の方が圧倒的に多いから。それ以外の特殊能力を複数の人間が使えるようにしたのが第三世代IS。オルコットさんのブルー・ティアーズと凰さんの衝撃砲がそうだよ」

「なるほど、それで、白式の唯一仕様は零落白夜なのか」

零落白夜、エネルギー性質のものならばすべて無効化・消滅させる白式の最大能力

しかし発動の代償には自らのシールドエネルギーを削る

そしてこれは俺の絶対守護領域を現在唯一破ることができる武装でもある

そもそも鋼はそのほとんどがビーム兵器

つまり俺とオルコットは一夏にたいしてかなり相性が悪いのである

「・・・どうにかしてシールドエネルギーを減らさずに零落白夜を使えないかな？」

「そんなことできたらパワーバランスが崩壊するだろ。何事にもそれに伴う代償がある」

そんなチートが許されるのはアニメの中だけだ

あんなものを無制限に使われてはたまったものでない

「白式は第一形態なのにアビリティーがあるっていうだけでものすごい異常事態だよ。前例がまったくないからね」

「しかもその『零落白夜』って織斑先生の初代『ブリュンヒルデ』が使っていたISの能力と同じだよな？」

そうここがおかしいところなのである

唯一仕様はその名のとおり唯一の能力である
それが同じであるなどというのも前例がない

しかし物事には必ず理由がある

いつかは説明するつもりでいる

「まあ、姉弟だからとか、そんなもんじゃないのか？」

「ううん、姉弟だからってだけじゃ理由にらないと思う。さっきも言ったけど、ISと操縦者の相性が重要だから、いくら再現しようとしても意図的に出来るものじゃないんだよ」

もしそ理由が解析できたらおそらくまた世界は変わるんあるうな・

「じゃあさっそく射撃武器の練習をしてみようか。一夏、はい、これ」

そういつてシャルルはさっきまで使っていた五五口径アサルトライフル『ヴェント』を一夏に渡した

「あれ、でもほかの人の武装って使えないんじゃない？」

勉強不足だな一夏・・・

「基本的にはね。でも持ち主が武装を使用許諾をすれば使えるんだよ

「ちなみにこれも常識だからな？」

「いま発行使用受託を白式したから試しに撃ってみて」

「えっと、構えはこうでいいのか？」

「あ、もうちよつと脇をしめて、そうそう、で左腕はこっち」

かなり自然に織斑に教えていくデュノア

本人もまさか自分が今データを足られているとは夢にも思わないだろう

というか、一夏はどうも人をなかなか疑ってかからない早い話かなり甘い

だが俺は見逃さない

デュノアがこの訓練を始めてから今までの映像を記録していることをちなみに俺が今回参加したのはデュノアを監視するためである

「火薬銃だから瞬間的に大きな反動が来るけど、ほとんどはISが自動で相殺するから心配しなくてもいいよ。センサー・リンクは出てる？」

「銃器を使うときのやつだよな？この機体それもないみたいなんだよ」

普通近接型ISであっても一応は銃を使うことを考えてこのシステムは搭載されている

しかし白式にはそれが無い

完全なる近接ISというわけである

なんというか非常に未完成極まりない機体である

俺なら絶対にこんな機体は作らないな

「ま、それだけ一夏とワンオフアビリティに自身があるんだろうね」俺はとりあえずそう返しておくことにした

その後一夏はデュノアから借りたヴェントを撃った
それなりに形にはなっていたようだ

俺は狙撃銃などは使わないのでそこらへんはよくわからないのだが
この鋼に搭載されているのはすべて銃の形をとらない遠距離武器な
のだ

そもそも威力は強すぎるので銃で撃つということが考えられないの
である

・・・まあそこらへんを可能にするべく今も開発を進めているのだが

と俺がそんなことを考え一夏のヴェントを撃つ音が聞こえるなか急
にアリーナがざわつき始めた
ここで訂正しておくとも最初訓練を始めたときは少なかった人が今は
少し増えていて観客席にも人が増えていた

大方ここで俺たちが訓練しているということで見学に来ているもの
も多いのだろう

「・・・・・・・・」

さて、急にざわつき始めたアリーナ

その中心にいたのはもう1人の転校生、ドイツ代表候補生ラウラ・
ボーデヴィツヒだった

誰とも会話をしない孤高の女子

あまり話しかけたくない雰囲気だし話しかけてほしいとも思ってい
ないだろう

初日にも感じたがこいつは他人を見下しているようである

やれやれ、孤高と孤独は違っただけだね

「おい」

ISの開放回線で声が飛んでくる

しかし、それは一夏のみに向けられていた

「・・・なんだよ」

一夏はこれに対していやそうに返事をする

転入初日にいきなりはたかれてはこういう反応になるだろう

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え」

いきなりの申し出、というか命令にさらにいやそうな顔をする一夏

「イヤだ。理由がねえよ」

「貴様になくても私にはある」

ボーデヴィツヒは一方的にそう告げる

なんとも自分勝手なことである

「また今度な」

「ふん。ならば 戦わざるを得ない様にしてやる!」

言うが早いか、ラウラはその漆黒のIS、たしかシュヴァルツエア・レーゲン（Schwärzer Regen 黒い雨といったか、を戦闘状態へシフト

直後、左肩に装備された大型の実弾砲が連続で火を噴いた

「！」

「…こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようとするなんて、ドイツの人はずいぶん沸点が低いんだね
ビールだけでなく頭もホットなのかな？」

「……………」

いきなりの攻撃に対してそれを防いだデュノアと風
一夏は二人にかばわれる形となっている

デュノアはヴェントを呼び出しそれを構えながら威嚇しそれとは対照的に風は何事もなかったかのように平然としていた

「フランスの第二世代ごときで私の前に立ち塞がるとはな。ところでその貴様、今何をしている」

ボーデヴィツヒは風に向けていう
風はアリーナを去ろうとしていた

「何って、帰るだけだ」

風はそんなこともわからないのかといったげに答える

「ほう、實力差を理解し尻尾を巻いて逃げるのか。殊勝なことだな」

それに対してボーデヴィツヒは馬鹿にしたようにいう
というか完全に馬鹿にしていた

だが風はそれを気に留めることもなくその場を立ち去っていった

動き出す陰（前書き）

なぜか書きあがったので更新しました

できれば感想、評価お願いします

動き出す陰

あの後俺はそのままいつもの整備室に移動していた

あの時ボーデヴィツヒの攻撃を防いだときに少し違和感を感じたからだ

いつもするわけではないが今までにもああいった状況に対処するために守護領域を緊急展開したことはある

ちなみにこの鋼は武装などを展開しなくても守護領域を展開することができる

普通のISが可能とする部分展開

それをさらに開発をすることで能力だけを展開することができるようになったのだ

とはいえ守護領域以外は必然的に部分展開しなければならないのだが

さて、それはおいておくとしてそのときいつもとは違う違和感を感じた

なにか自分とは違う何かの思考が一瞬は入ったような気がしたのだ
いつも通りに演算をしたはずなのだがいつもよりも展開がわずかではあるが遅れた

そのわずかなタイムラグが普通の不具合とは違う自分の思考にノイズが混じったような感じがしたのだ

この鋼にはイメージインターフェイスを応用発展させた思考トレースシステムが採用されている
思考トレースシステムとはその名のとおり思考をISの動きに転用するシステムのことである

全身装甲である鋼や紅蓮はこのシステムを使用しないと装備などの変更、システムの変更ができないのである

普通の機体で可能な空中ディスプレイを使用しないためである

このシステムを使用することで演算をそのまま入力することができるのでラグが発生することはないのである

しかし今回は途中で一瞬それが乱れたのだ

なのでその原因を発見するためにここに来たのである

それにしても・・・

「なぜここにいるんだ？」

そう、なぜかここには生徒会長である更識楯無があたりまえのよう
にいたのである

ちなみにここに入ったときは間違いなく誰もいなかった

俺は整備をいているのを他人に見られるのが好きではない
整備を見るということはその仕組みを理解する機会を見せるという
ことになる

当然それだけで理解できるものはほとんどいない

鋼はそれぐらいの能力をもった機体なのである
しかしながらヒントを与えることに変わりはない

映像としてそれを記憶されそれがもしもどこかにもれた場合それは
すさまじい損害になる

俺は別に技術提供をするのがいやなわけではない
もしいやならば慣性停止結界などの技術を提供するはずがない
まあ自分であるということは公表してはいないものの確かに世界に

対して技術提供はしている

ここだけの話鋼の守護領域はこの慣性停止結界の応用によるものである

もちろんそれだけではないがもしデータを解析し、それを理解することができ人物ならば守護領域を解析することなど造作もないのだろう

早い話俺は自分の意思ではないところで自分の技術を使われるのが嫌いなのだ

この世界はいつでもギブアンドテイク

それが俺の今まで生きてきての結論

何かを得るためには何かを犠牲にしなければならず結果には必ず代償がある

勝手にデータを取られる、応用されるということは代償なしに利益を得るということだ

俺はそれが許せない

どんなものでも俺が生み出した技術には代わりがない
それに誇りを持っているのだ

それを汚すということだからだ

さらに言えば俺は亡国企業に以前してやられたことがある

あれは俺が倉技研に入って間もないころ

そう、イメージインターフェースを開発しその技術の一部を公開し
たときの話だ

そのときいろいろとあってね

・・・え？そのいろいろって何か？

いや、説明すると長いんだけど早い話そのとき俺が開発を進めてい
たISのデータをそのまま盗まれたんだよ

しかもご丁寧にウイルスのおまけつきでね

そのためその開発は途中で断念することになってしまった

しかもまずいことにそのとき盗まれたISのデータは解析し開発することができれば世界が変わる

そう、俺が今開発を進めている”エナジーウイング”のプロトデータなのだ

もっと正確に言うならば俺が考えうる限りで最高性能のISの開発のプロトデータだ

そのスペックは実現できれば簪の紅蓮をしのぐ性能を誇る

とはいえあくまで原案であり実現可能かどうかは考えていない上、もし仮に作れたとして乗りこなせるものはいないだろう

あれを開発できるものが亡国企業にいるのかはなぞだがいまのところあちらでも開発は進んでいないようだ

まあ、開発計画者の俺が難航しているこれをそう簡単に完成させられるとは思えないが・・・

ちなみに俺は別にこのことで世界がどうなろうと知ったことではないのだ

はつきりいつて俺はそんなことに興味はない
ただ俺は開発者として亡国企業にしてやられたという事実が気に入らないのだ

だからつぶす

それだけだ

なので整備するときは基本一人でやるのが常である
整備しているときは簪や本音ですら入れたことはない

なので俺の整備を見るのは楯無が初めてということになる

「あら、さつき普通に入ってきたわよ？」

俺の問いに対してさも当たり前のように答える楯無
だが本気ではないことがよくわかる

なぜなら楯無の扇子に『隠密行動！』と書いてあったからだ

「はあ、ま見ちまったものは仕方ない」

俺はあきらめながら言う

もちろん見られたくはないがこいつはそんなことはしない

「心配しなくても映像は撮ってないし技術を盗む気もないわよ」

「当然だ。というかもその気なら俺の前に現れないだろうしな」

技術を盗むのが目的ではないという楯無
ではなぜここに來たのだろうか？

こいつは一応生徒会長

仕事はまだまだ残っていて大変だと虚から聞いていたのだが・・・

「当然抜け出してきたのよ！」

扇子には『戦略的撤退』と書いてあった
というか俺声に出してないのになんで考えてること読めたんだ？

「なっちゃんと私は一心同体だからよ！」

はあ・・・こいつはそういうことを平気で言うんだよな
もちろんうれしくないわけがない

こいつは身内目を抜きにしても相当にかわいいのだろう
恋という感情はよく理解できていない俺ではあるがそういう美的感
覚に疎いわけではない

むしろ人よりそこには敏感であるといえる
前服を買いにいったら気づいたら2時間以上たっていたことがある
ほどだ

「そういうことを簡単に言うから人たらしって言われるんだよ」

俺はため息混じりに言う

こいつは外見がかなりいい

容姿端麗三色兼備というみなぐらやむほどのスペックを持っている
そのためIS学園の生徒からはかなり信頼されているし人気もある

しかしながら教師陣からは信頼はされているものの人気はあまりない
のである

その原因がこの言動にある

誰に対してもニコニコと接し決して本心を出さない

しかしそれを悟られることがないため周りからは人たらしにしかう
つらない

「こんなことなっちゃんにしか言わないわよ」

「そうですか」

俺は気のない返事を返した

ここで取り合つと面倒なのだ

「むゝわたしってそんなに魅力ない？」

楯無はふてくされながら聞いてくる

「一般的にみて十分魅力的だろう」

俺は当たり障りのない内容を返す

「なっちゃん自身の意見が聞きたいの！」

楯無はすこし怒ったように聞いてくる
どうやらなんとしても聞きたいようだ

しかし甘いな

「そうだな、その髪についてる録音機器をここで破壊するなら答え
てやるよ」

そう、こいつはなんとしても俺の口から聞きたかったのだろう

『かわいい』という言葉を

しかしそんな手には乗らない

もちろん俺はかわいいと思う

それを言うのをためらうわけでもないし録音されて困るわけでもない
しかしながらわざわざ乗ってやる必要もないので乗らないことにした

「え〜と、何のことかな〜」

あえて白を切ることにした楯無

しかしその表情はまずっとたな〜という表情をしていた
そしてそれを見逃す俺ではない

だが先ほども言ったように別に困るわけではないのだ

白を切るのならそれでもいい

ただ答えないだけなのだから

「ま、白を切るならそれでもいいよ。しばらく口きかないだけだから」

こいつはたいていこういうと折れる

今までもそうだった

これからもそうであるかは微妙ではあるが試してみる価値はあるだろう

・・・ちなみに俺は怒っていない

ただなんとなくからかって遊んでみたくなっただけだ

昔の自分では考えられなかったな〜と思う

誰も信用せず誰も必要としない

だから孤立するしていた

いや、自分からそれを選んでいたのかもしれない

だれも俺を見てくれない
誰もおれ自身を見てはくれない

俺がどんなにがんばっても俺が両親の子供だからと周りには捉えられた

だれも俺の努力を見てくれない

そして両親が死んだら今度は俺の能力しか見てくれない

誰一人として俺を見てくれた人はいなかった

今考えると楯無や簪と会えたには幸運だったと思う
人は一人では生きてはいけない

人は自分以外の他人を認識し必要とすることで生きていくことができるのだから

さて長くなったがつまるところ俺は今の日常に満足している

もちろん知識への探究心は費えていないし衰えてもいない

だが今の世界が嫌いではない

以前はすべてを破壊してもいいと思っていた
だがこの世界には大切なものが増えすぎた

俺には大切なものが増えすぎたのだ

だから俺は守りたいと思う

この日常を、俺の大切なものを

たとえそれと引き換えにすべてを失うことになったも!!!

・・・なんてシリアスなことは考えてないwww

そこまで深く考えたことは今までない

俺はただなんとなく生きているだけだからね

俺のモットーは”緩やかなる日常”だからね

そんなわけで俺はその後虚が楯無を迎えにまで楯無で遊んだ

この緩やかなる日常が続くことを祈りたいね

another side

私には本当の名前があった

お母さんがつけてくれた本当の名前

私が私であるための最後の絆の証

でも、それを捨てなければお母さんが死んでしまっただ

だから私はどんなことをしてもお母さんを助ける

たとえその方法が間違っているとしても、どんなに人道的でなかったとしても

許されないことだとしても

私はそれを選ぶよ

だから霧生君、一夏君

許しは請わないよ

動き出す陰（後書き）

・・・動き出してないか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8257x/>

IS-インフィニット・ストラトス-知識を求めるもの

2011年12月20日22時45分発行